

# SAOIFハース前日譚(仮)

ハース/ユウキ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

原作《ソードアート・オンライン》と、実在するスマートフォン版MMORPG《ソードアート・オンライン インテグラルファクター》が混ざった世界観のMMORPGを舞台に、主人公《ハース》がキリト達や友達と一緒に階層を攻略してゆく物語です！

# 目次

## 第一章

第一話：仮想世界 1

第二話： 13

第三話： 26

第四話 45

## 外伝

上 60

中 71

下 81



# 第一章

## 第一話：仮想世界

眠い目を擦りながら、俺はふと窓の外に流れる街並みに目を移す。

〔「今日も、いつも通り……」〕

朝日が眩しい。その光を反射して、白っぽい建物達が輝いて見える………今は、まだ。  
〔「もう少し暖かかった頃はこの時間帯でも太陽の位置は高くて、ここまで眩しくなかったんだけどな……」〕

外に見える建物達が、多く、大きく高くなつてゆくにしたがって窓の内側にも人が増える。それはもう、まともに立つていられない程に。それでも今日は空いている方だ、スマホをいじる余裕があるのだから。ついでに “いい歳した大人達が高速で動く連なった鉄の箱の中でおしくらまんじゅうとは何事か” などと、よくわからない自虐めいた発想が出てくる心の余裕も。

酷いときはスマホどころか、自分の鞆を持ち直そうと少し動いただけでも周囲の空気がピリつく。

〔「みんな疲れてるんだなあ……俺もあと何カ月後には、この人たちと同じ様にスーツを着

てしかめつ面で…そして知らぬ間にオツサンになつてくんだらうか…」

そんな状態に十数分耐えておしくらまんじゅうから解放されると、いつもの発車ベルを背中で聞きながら改札へと繋がる階段を降りる。

「おう俊、内定決まつたか？」

軽快な男の声が俺を呼び止める。

「挨拶代わりがそれかよ…レオ」

今日は比較的余裕があつた朝なのに…コイツは。

「そりやどつかの白いライオンだろ！オレは人間だ！」

「苗字がそれ獅子王なんだから、諦めろ」

正直、お前の見た目のイメージは類人猿というよりライオンだよ…

「じゃあお前は極楽野郎だ！」

「はあ？」

「蓮の池だから」

「名前なんだから蓮池はすいけつて普通に読めよ…あと俺、無宗教だから」

「〔脳内極楽野郎はどっちだ。全く。〕」

心の中で毒づきながら、いつもの道を進む。

いつもの廊下を歩く。

「……………普段より臭う」

レオが鼻をつまむ。

「そうか？いつもこんな感じじゃない？これ木材の匂いだな、またきつと誰かが電ノコかヤスリを使ってたんだろ」

「オレこの臭い嫌い」

「俺も粉っぽいのは嫌だけど……木の匂い自体は好きだな」

そんな他愛のない話をしながら教室へ入る。

「二人ともおはよう！」

元気な女の声が俺たちを出迎えた。

「あつ……おはよう〜」

少し遅れて、のんびりとした女の声も聞こえた。

「よう、二人とも早いね」

「おーはよう！何作ってんだ？」

すると、最初に挨拶をしてくれた元気な女の子がニツと笑いながら木の板のような物

を勢い良く差し出す。見るとそれは下駄だった。

「おお!! 下駄出来てる!! すげーよりんり!! 今度やる演目の天狗のやつだろ?」

「そうそう! だからちよつとこれ履いてみて?」

俺たち4人は、1年生の頃から同じ大学の演劇サークルに所属している。サークル全体をいくつかの班に分け、その班ごとに仕事を分担して1つの演目を完成させる仕組みになっているためメンバーは他にもいるのだが、学年が違ったり、性格の合う合わないでこの4人でチームを組むことが多くなっている。ちなみに今俺たちは美術担当だ。下駄を作っていたのもこのためで、他には演技中に演者の後ろにずっとあることになる背景の絵を書いたり、椅子を作ったり、とにかく演目の為に必要な道具はほぼ全て作るのだ。

「あ、あのっ… 私ちよつとトイレ行ってくるねっ…!」

「ん! 待ってモモ私も行くー! 俊、私が戻ってきたら下駄履いてみた感想教えて!」

そう言い残して女の子達2人は慌ただしく教室を出て行った。

「なーんで女子って連れションするんだ?」

「え。……いや、知らないけど中学生くらいからそうじゃない? つか言い方…」

「そうだけだよ… 何してんだ? 一緒に行って」

「さ、さあ…?」



何だろう、このウブなのかただのアホなのか分からない雰囲気。誰に何かを言われた訳ではないのだが、なんとなくバカにされている気がする。

暫くの沈黙の後、不意にレオが口を開いた

「…で、お前最近どーよ」

「なにが？」

「…」

「なんだよ」

「あれだよ」

「……………。はあ。何も無いよ」

要するにあれだ、今俺はレオに俗に言う恋バナというやつをふっかけられたのだ。

「……………そういうお前は？」

「ふっ。オレ彼女出来たんだ」

「なんっ……………だと……………!?!」

うわっ…。驚いて改めてレオの顔をしっかりと見て気付く。コイツ今まで見たこと無いくらいニマニマしてる。口許緩みまくってる。若干引きつつも突っ込む。

「誰!?!てかいつ!?!どんな人!?!」

するとレオが徐に親指を立てて廊下の方に合図する。

「ん？…え？」

あつち？…今トイレへ行った二人のうちのどちらかということか!? レオの好みから推測すると…

「モモさんかああ!!!」

「バツツツカ声でばーよ俊つ……!!」

レオが慌てて必死に静かに!とジェスチャーを送ってくる。すると教室のドアが開き、二人が戻ってきた。

「ん？なになに、どしたの？二人とも」

リンリが不思議そうに俺たちを見る。

「い、いや…なんでも」

「お、おう 気にすんな」

全力で誤魔化する。が、後になって気付く。十中八九、この時点でリンリはモモの方から既に二人が付き合い始めたことを聞いているはずなので、ここで誤魔化した意味はあまり無かったのではなからうか…。

「まあーいいや!それよりさ、楽しみだね!今日からでしょ?配信開始!」

「へ?」

配信…?何かあっただろうか?リンリがこんなに嬉しそうということは、ネットかア

ニメ、ゲーム関連の話なのだろうが。

「新しいv t u b e r かなんか？」

「違あー！うー!!嘘でしょ!?覚えてないのアンタ!？」

不正解らしい。…何だ?本当に分からない。

「俊くん今のゲームでも忙しいから…仕方ないよ。ね?リンリ」

「そうだなあ、でもナーヴギアで出来る初のM M O R P G なんだからもうちよい楽しみにしてくれてても良いんじゃないの?オレら一緒に行列に並んでやつと入手出来たんだしよお」

あつ思い出した。そしてフォローとヒントをくれた君たち、その息のピッタリさはや夫婦の域じゃないか?

「ああ、ソードアート・オンラインか!」

「そー！ー！ー！だよおー！ー！ー！ー！ー!!やつと思ひ出したか!!今日からだからね!!  
2022年11月6日午後1時正式サービス開始いい!!」

テンション高っw

「オレら今日午前で作業終わりだから頑張れば1時から出来るんじゃないか?」

「そー！ー！なんだよレオお!!ということ!!皆帰ってログインしたら、はじまりの街

“ っっていう初期の街の時計台前に集合!!…しよう!?”

「おーおー!!」

「お、おー…」

ああ、そうか。俺以外の3人はMMORPG自体が初めてだった。夢のファンタジー世界への期待に溢れているのか。MMORPGとは、大規模多人数同時参加型オンラインRPGのことで、プレイヤーは各々が異世界の一員としてゲームを楽しむが、一人に一つの世界が割り当てられるのではなく、一つの世界に大人数がログインする。よって仮想世界でありながら現実世界のそれとほぼ同じ社会性が必要とされる。相手が生身の人間である以上、人間関係のいざこざも存在するのだが、俺以外の3人…そのうちのリンリもこのことをまだ知らない。

（「夢のファンタジー世界に行ける!」といっても、そこで考えたり、気にするべきことのほとんどは「現実とそれほど変わらない」んだよなあ…まあ、現実にはいないモンスターやらと戦ったり、経験値を得たり…いや、そもそも銃刀法違反必至な得物をぶら下げていられるっていう意味ではもう「仮想」なんだろうけど）

それはさておき、初のMMOがナーヴギアで出来るというのは少々羨ましい。従来のMMORPGは、デバイスも違ってても基本は「画面」と「コントローラー」が必要だった。しかしこの「ソードアート・オンライン」は違う。ナーヴギアというデバイスを用いている為だ。ナーヴギアはフルフェイスのヘルメットのような形をしていて、プレイ

ヤーは頭にそれを被って使用する。そして、人間が体を動かすために脳から脊髄、抹消神経へと送られる電気信号を首の後ろの辺りで遮断・読み取り、その信号をゲーム内のアバター操作へ流用する。要するに、プレイヤーにとつてはまるで「自分がそのまま仮想世界に転生した」かのような感覚が味わえるのだ。

上記2つのことを考えれば、リンリのテンションの高さも頷ける。ナーヴギアの機能については、少し俺も興味を牽かれるところはある。

そんなことを考えながら俺はスマートフォンをポケットから出し、いくつも並ぶアイコンから1つのSNSを選び、起動させる。ネットで既に付き合いのある、言わば「ゲーム仲間」と連絡をとる為だ。

（「はあ：どーしたもんかな：」）

俺は今、前述でいう「従来型」のMMORPGでギルドマスターをしている。ギルドというのは、MMOのプレイヤー達が任意で集まるコミュニティのようなものだ。その在り方は三者三様だろうが、基本的にはそのギルドの方針・加入条件・活動はそのギルドのリーダーであるギルドマスターの思想が大きく反映されている。そこで俺はギルドの方針として、第一は「楽しむこと」第二に「強くなること」を掲げ、第一方針の達成のために毎週曜日を決めて「ギルド集会」、「ギルドイベント」を開き、システムの達成のための恩恵を極力平等になるように分配するよう務め、クイズや黒○げ危機一髪を

模したミニゲームや腕試しのデュエル等、様々な企画を用意したり、時にはギルド内外共にトラブルへの対処と、色んな意味で充実した日々を過ごしていた。もちろんそれはギルドマスターである俺だけの力では到底ムリなこと、サブマスターをはじめとする、多くのギルメンの力添えがあったからこそそのものだ。

そしてそれは、連絡を密にとることからはじまる。モモが先程リンリに「俺は他のゲームでも忙しいから：仕方ない」と言ったのはこういうことだ。

そして、そのギルメンを含むゲーム仲間にもやはり「ナーヴギア」に牽かれる者が多く、SNSのTLも「ナーヴギア」の話で持ちきりだ。そのせいか若干このMMOのプレイ人口自体が減りはじめ、俺たちのギルドも例外ではなかった。更には俺自身もリンリ達に誘われてナーヴギアのゲームを始め、最終的には移住（自分が主に遊ぶゲームを変えること）することになるのではないかと思っている。そこで俺は今《ギルドマスターの引き継ぎ》もしくは《ギルドの閉鎖》という二択を迫られている。

サブマスターたちとは一緒にやってきてもう3年目なこともあり、《お前がギルマスを辞めるのなら自分らもギルドを抜ける》と言われている。自分がそれほど信頼されているという面ではすごく嬉しかったし、自信にもなった。しかしそれは同時に《自分がいつかはゲームを去る時を念頭に入れて、後継者を育てておく》という集団のリーダーの役割のうちの一つがこなせていなかったということにもなる。《ギルドの閉鎖》とは、

現在も所属してくれているメンバーから “自分が気に入っていた環境を奪う” ことになつてしまふのだ。本人の意思とは関係なく、強制的に。

そこまで言うならその残されたメンバーにギルドを託せば良いではないか。という意見もあると思うが、自分がやってきたことを考えると、仕事量からも、精神的負担からも、相当の覚悟がないと《引き継ぐ》ことは出来ないという結論は揺らがなかった。おまけに、引き継ぐごうとしてくれたメンバーに “託されたのだから放り出せない、潰せない” という余計なプレッシャーを残したくなかった。後半は完全に俺のエゴだ。

その件についての最終決定を下すためにも、今週末のギルド集会は欠かせない。その為俺は起動させたSNSのギルド幹部連絡用のメッセージルームに

『皆に意見をきいて自分でもよく考えてみたところ、やはり閉鎖という形をとるべきだと思うのだが、それを今週末の集会で話をしようと思う。承認を頂けるだろうか?』という内容と、『今日はこれから大学の友人達と “ソードアート・オンライン” をプレイしてくるのでメッセージの返事は遅れると思う』という内容を書き込み、スマートフォンを置いた。

それからいつも通り今日の分の製作作業を終えた。日曜日なのであまり多くはないが、談笑しながら学食へと進む学生たちを尻目に俺たち4人は早足に駅へと歩く。

「じゃあ!みんな分かっているね!?1時に!はじまりの街っていうところの!時計台の下だからね!キャラ名決めたらL I O Eで教えて!」

「おう!あ、オレはL e oのままでもいい!」

「えっじゃあ私もM o m oのままにするよ!」

えっマジで?みんなそれリアルネーム:ではないかニツクネームとはいえ……ま、まあいいか。

「えーそーなの!?じゃー私もL i n i にする!ほんとにエリザとかにしようかと思っただけど!」

「ぶっwwwwどっから出てきたんだよエリザって!」

思わずツツコンでしまった。

「え?良いじゃん!かわいくない?」

ああ…心配なことは多いけど、なんだかすごくこれからの冒険が楽しみなってきた!

心の底からそう思っていた。あの瞬間までは。



## 第二話：

朝はきらきらと白く輝いて見えていた建物も今は発色よくハッキリと見える。

「キャラ名なあ……うーん……」

駅前のコンビニで調達した昼食のサンドイッチを見つめ、電車に揺られながら呟く。時計は昼の12時過ぎを指している。家に着いたら即こいつを平らげ、諸々細かな用事を済ませて12時55分くらいにはナーヴギアを携えて13時になるのを待ち構えていたい。

（「レタス……卵……トマト……マトマトマハトマ……いや、ガンジーかよ!! インド独立の父だよ!! 非暴力だよ!! 武器を振り回すゲームのキャラ名に使うとかなんてバチ当たりな!!」）

先程別れ際に、リンリが自分のキャラ名を『エリザ』にしようと思ったと言っていたのを笑ってしまったが、名前の候補すら1つも出せていない俺に言えたことではなかったのでは……？

「はああ……」

前述の通り、従来型のMMOをプレイしていたりと俺には既にネット内のハンドル

ネームはあるのだが今回はリアルの友達と遊ぶということもあり極力それを流用するのは避けたい。別にやましいことがある訳では無いのだが、リアルとネットは分けて考える努力が必要であると思っっているからだ。といってもゲームのキャラクター＝生身の人間なので完全に切り分けることは出来ないが、『リアルからネットに持ち込む事情はゲームを楽しむ上で必要最低限、もしくは本当にたわいも無い軽い雑談までが基本』この認識があるのと無いのでは、ネット内、リアル共にトラブルに見舞われるリスクが雲泥の差だ。ギルドなどのコミュニティに所属する予定や希望があるなら特にだ。これは3年以上のギルドマスター経験則からも断言できる。その頃経験した事件たちを思い出すとすると吐き気と軽蔑しか感じるものは無い。

ともかく、新しいキャラ名を考えているとふと脳裏にレオの声が蘇る。

〃 「蓮の池はちすのいけだから」 〃

はちすの…はすのいけ…はす……あ。

「ハースとか？」

（「単純だけど名前っぽい響きじゃない？よくね？」）

L I O Eで先程の3人にこれを報告する。

「おー決まった!?!苗字から来たかー! (笑)」

「呼びやすくもいいね」

「やっぱ蓮<sup>はす</sup>じゃんか。まあ了解！」

そうこうしているうちに家に着いたので大急ぎで用事を済ませる。俺は一人暮らしなので自分のペースで物事が進められて便利なのだが、家事全般が全て自分の仕事になる為、溜め込むととんでもないことになる。途中でサンドイッチを喉に詰まらせそうになりながらもなんとか無事13時前に用事を済ませることが出来た。念の為窓のカーテンも閉めようと手をかけるが、明るく暖かいうちに閉めてしまうのは少々もつたいな位と思いい瞬手を止めてしまう。しかしすぐに近頃日が短くなっていることや、もしかしたら夜遅くまでノンストップでみんなとソードアート・オンラインを遊ぶことになるかもしれないと思いい直しカーテンをしつかりと閉める。

「ふう……」

ベッドに横になり、ナーヴギアを頭に被る。

（「これ、閉所恐怖症の人とか大丈夫なのかな……？」）

そんなことを考えていると時計はもう13時になっていた。

「あつ…… リンクスタート！」

ナーヴギアを起動させた瞬間から妙に体が軽くなった気がする。これが「フルダ  
イブ」ということなのだろう。円形に並んだ色とりどりの光線がいくつも前方から  
伸びて、俺の周りを通り過ぎてゆく。するとすぐ青色ベースの不思議な空間に出た。目  
の前にはSF映画にありそうなホロウインドウと人形フィギュアがある。そしてその  
上部には白い文字で

《Character Create》

「キャラクター…クリエイト…ふむ」

敢えて日本語で言うならばゲームのキャラクターの新規作成画面ということだ。：  
いや、ナーヴギアを使っているので画面というより場面と言った方が正しいか。

「うーん…身長や体格はなあ、自分とあまり変わらない方がラグが少なそうだよなあ…  
だから、自分の体を再現した感じが良いと思うんだ」

「髪も…大して変わらないかもしいけど3DCGの技術的な面を考えるとあまり髪  
が長いと短髪に比べて本当に微量ではあるが動きが重くなったりしないだろうか…」

「どうせなら現実じゃ絶対なれないような体格になりたい!!」等と思えたら良  
かったのかもしれないが、それよりも操作性・利便性を優先させた思考になる辺り、い  
つも好奇心旺盛なリンリ辺りに後でどやされそうだ。

「いれで…よし」

完成したアバターは、180cmギリ無い位の身長、色白、黒髪で、ツンツンして多少幼く見えてしまいがちな前髪の短髪姿に口元に黒子がある姿だった。

髪を表示負荷を考えればスキンヘッドが一番良さそうだがそれを選ぶのは少々気が引けた。理由は聞かないで置いて貰えるありがたい。体格はリアルの自分に近付けたので肌の色くらいはリアルと違うものにしてみようかと思っただが、以前レオに聞いた話によると『肌が黒いと筋肉の凹凸が目立つようになる』とのことだったので、一応ずつと運動部だったのでそれなりに筋肉はついていると思うがそこまで筋肉自体に自信があるわけでもなく、大人しく室内競技由来の肌の色をそのまま採用した。ちなみに黒子は何となくだ。強いて言えば顔のペイント機能をどれか1つ使ってみたかった。（「少し時間をかけ過ぎたかな？みんなもう待ってたらどうしよう」）

少し焦り気味に決定ボタンを押す。すると今度は名前を打ち込むウィンドウがポップアップした。

《ハース》

ウィンドウにそう打ち込み再度決定ボタンを押す。

《Welcome to Sword art Online!》

アラーム音とともに目の前いっぱいこの文字が表示され、その文字の中心に向かっ

て加速・突進してゆくような演出がされ、おまけに強い白い光で視界がホワイトアウトした。

（「…!?!? ……………。い、一瞬ビビった。ビビったけどそうだよね、何もせずいきなり謎の文字に追突するなんてことはないだろうし、その……昔観た宇宙物のSF映画にもああいうシーンあるよね、こう、ビームサーベル的なものを扱う侍っぽい人たちとか、宇宙規模の空中戦とかある映画の、とりあえずかつこいいやつ……」

「………………。えっと…………？」

視界が戻ると、見知らぬ風景が広がっていた。全面石畳の地面、それと同じ様な雰囲気  
の建物、目の前に見えるのは草原、その奥には雲一つ無い青空。

「おおっ……………!!」

これぞファンタジー系ゲームお馴染みといっても過言ではないほど絵に描いたよう  
な草原……………

「わつとと」

「おっと！悪い大丈夫か？」

思わず景色に見とれてしまい、誰かとぶつかってしまった。

「こちらこそ、すみません」

「いいっていいって、どうせ痛くねえしよ　…それよりおめえ、そんなにブーツとしてどうした？」

そうだ、景色に見とれている場合ではなかった。みんなを探さないで。

「えっと…友達を探してて…」

「友達とはぐれたのか…：…そういうことならひと肌脱いでやるぜ！」

よく見るとその人は、赤紫っぽい長髪に紅いバンダナを巻いて無精髭を生やした笑顔が似合う好青年だった。

「オレはクラインってんだ！よろしくな！」

「僕はハース、よろしく！クラインさん」

「おう！それと堅苦しいのは無しだ、呼び捨てで構わねえよ　…そこで、ダチ公とフレンド登録は？」

俺はふるふる、と首を振る。

「まだしてねえのか…：それなら転移門広場を探してみな、大概のプレイヤーはあそこに集まるからな。案外友達も広場でおめえのこと捜してんじゃねえか？」

「ありが……あ。」

「ん？どうした？」

「待ち合わせの場所が……はじまりの街」  
 つていうところの、  
 “時計台”の下つてい  
 ……」

そこまで言うとかラインが少し目を見開いて笑いだした。

「ぶっ……はははははははは!!!」

え、ええ……何事だ。思わず困惑する。

「いやあすまねえ、悪気は無えんだ。お前さん最つ高だな！後ろを振り返つてみるよ」  
 ……？ 言われた通り振り返つてみるとそこには…

「………時計塔だ」

「おうよ、ちなみにここの名前は“はじまりの街”だ」

「………わぁーお」

ニヨニヨ笑いを浮かべるラインを苦笑いで見つめ返す。

「……まあ！オレもダチが来るのを待つてるからよ、一刻も早く合流してこの興奮を語り  
 あいたい！つて気持ちよつくわかるぜ……みんなリアルの都合があつてオレだけ先に  
 来ちまつただけだな。」

この人……相当フルダイブにハマツてるんだな、すごく嬉しそうだ。まあ……確かに目の



前に広がる景色は前述の通りファンタジー世界のそれなので、俺も気持ちはずごくわかる。

「あいつらが転移門広場に集合するまでレベルの二つ三つもあげてリーダーの威厳を見せるとするかね！ そんなじゃな、おめえもダチに会えるといいな！」

最後にもう一度ニツと笑うとクラインは広場の奥へと消えていった。そういえば、俺がやっている従来型ゲームの知り合いは何人くらいこのソードアート・オンラインも始めるのだろうか。なんとなくそんなことを考えていると黒髪、セミロングの可愛らしい女の子が声をかけてきた。

「あの…すみません、もしかして……」

「……？」

「ハース？」

「へっ？ えっ？！」

だ、誰だ？ 少し大人しめな可愛い雰囲気の外見のキャラにしそうなのは…モモだろうか…いや、レオのイタズラか？

「モモ？」

「…え？ 違うよ、コハルだよ！ 忘れちゃった…かな？」

コハルと名乗った少女が悲しそうな顔になる。

「えっと……ごめんね、人違いじゃないかな……？君は“ハース”っていう人を探してるの？…僕の名前もハースだけど、ちよつと“コハル”っていう名前には心当たりなくて…」

悲しそうな顔が更に歪む。

「ごっ……ごめんなさい!!間違えちゃったみた……」

コハルの言葉を遮るように突如時計塔の奥から橙色の物体が黄緑色の閃光を引き連れながら突進してきた。

「あ………!!!やっつっつと見つけたあ!!!」

今度は何だ!?

「お、おいおいおいいくら街中はダメージ食らわないとはいえこんなに人がいるところで武器振るんじゃないよ!!」

「そ、そうだよ！他の人の迷惑になるし、人に当たったらどうするの……？ハースだってゲーム初心者って訳じゃないんだからきつともうすぐ来るよ〜!」

あつ………わかった。叫びながら慌ててこちらへ走ってくる……一人は茶色、もう一人は群青色の髪をした二人……あれ絶対レオとモモだ。ということは最初の橙色は…

「ハース!!いつ来た!?!ずつと探してたんだ……よ………んん?」

「ご、ごめんリンリ、1時丁度にログインしてすぐみんなを探そうとしてただけど

ちよつと色々あつてさ……」

リンリは後ろで1つにまとめた髪を揺らしながら俺への言及を始めたが、コハルさんに気付くとそちらへ興味を惹かれたようで言葉の勢いが収束してゆく。

「あつ……ご、ごめんささい！ 私が声をかけたせいで皆さんまでお待たせしちゃったみたいで……」

「いやいや！ 謝らないで！ ただ、珍しいなあ……ハースが女の子ナンパしてるなんて」

コハルさんがギョツとした。正直俺もだ。

「違うよ!? なんでそうなるんだよ……こちらコハルさん。『ハース』っていう名前の友達を探してるんだって、それで話してたんだよ」

リンリに遅れて寄ってきたレオとモモが俺とコハルを囲むように並ぶ。

「ふーん……なるほどね！ 知り合つたのも何かの縁かな……？ 私はリンリ！ こっちはレオとモモ！ コハルさん、よろしくね！」

「皆さんよろしくお願ひします！」

コハルさんも含め、リンリたちも一気に笑顔になる。するとモモが言った。

「コハルさん、一人で探すより5人で探した方が早く見つかるかもよ？ 私たちで良かったら手伝おうか？」

リンリ、レオ、俺も同意の意を込めて頷く。

「えっ…大丈夫です…そこまでお世話になる訳には…そもそも、会える保証なんてどこにも無いんです…皆さんみたいに約束した訳ではないですし。それより!!リンリさん!!」

「うん?」

「さっきこつちへ来るときの突進技って…ソードスキルですよね!」

「そ、そうだけど…?」

突然コハルさんのテンションが上がる、元気になってくれたのは良いがどうしたというのか。

「やっぱり!!えっと…その…私にスキルの使い方を教えてもらえませんか? 私不器用だし…自信がなくて…」

ああ…確かに、このゲームの遊び方の基礎である、ソードスキルの使い方を教えて貰えるかも、となれば嬉しくなるか。

「私は構わない…けど…みんなもいい?」

「「もちろん!」」

「ありがとう!!」

すかさずリンリが続ける。

「じゃあみんな、 “原始の草原” に行こう! 町の近くならモンスターも強くないって読

んだし！」

「雑誌…？」

コハルさんが首をかしげる。

「うん！この数カ月ソードアート・オンライン関連の記事は漏れなく読んだからね！！β  
テストの情報とかも、公開されてたところは全てチェック済み！！」

「あはは…」

「さっすがリンリ！」

「ハモってる…仲のよろしいようで」

こうして僕たち5人は冒険の一步を踏み出した。

## 第三話：

はじまりの街を出て原始の草原へと移動するとすぐに青いイノシシと、人の頭ほどの大きさの黄色い蜂が目に入った。リンリによると街の出入口付近に出没するのはこの二種類のMob<sup>モンスター</sup>だけだそうだ。

「そういうえば、みんなほどの武器をメインにするの?」

先頭の方を歩いていったリンリが振り返りながら足を止める。

「オレは斧だな!」

レオが背中に背負っていた簡素な斧を掴み前へと構える。

「言うと思ったく…レオ、体格も良いし似合ってると思うよ」

おお…普段大人しいモモがすぐ話に…いや、惚気かな?これ。

「だろっ!?斧自体が重い分威力もありそうだしな!そういうお前はどするんだ?モ  
モ」

やっぱ惚気だな、誰も割って入れないやこの二人の会話。

「私はく…槍にしようかなあ…歩き疲れた時に杖にも出来そうだし」

「はっ?杖!」

「うんっ！杖！」

前言撤回。全員で話に割って入りツツコみを入れてしまいました……

「な、なるほどー！確かに槍って斧と同じくらいの長さはあるけど細いから軽いしね！色々便利かもね……ね！」

リンリの苦しいフォローが入ったが当の本人はいつの間にか実体化させた槍を手に、こちらに背を向けて人のいないスペースを求めフラフラと移動していた。そのまま槍をバトンのようにくるくると回転させたりと楽しそうにしているのでそつとしておこう。……というか、回すの上手いな。実は槍の適性高いのでは……？

「んで、ハースは？」

「えっ？うーん……」

この手のゲームではいつも直剣を使っていたので、今回も立ち回りをなんとなく把握している直剣を選ぼうと思ったのだが……自分の体を動かして戦うこのゲームで果たしてそれに意味があるのか疑問だ。それに純粹に興味本意で他の武器を試してみたい気持ちもある。

「直……いや、細……うーん……」

「なんだよもうー！！まあ、そんな風になるんじゃないかと思ってたけどさあ！」

俺のハッキリしない返事をリンリが勢いよく笑い飛ばす。

「コハルさんは？何にするかもう決めてたりする？」

未だメイン武器を決めかねている俺を尻目に、リンリはコハルさんへ駆け寄る。

「えーつと……私は……」

コハルさんは真剣そんな顔で自分のウインドウを見つめている。そうだよ、やつぱら悩むよね……決めるのに時間かかるのは俺だけではな

「細剣にします……この中では一番軽くて扱いやすそうなので！」

……うん、決めるのに時間かかるのは俺だけだね、うん。知ってた。シツテタヨ……なるほどね！じゃ一番簡単なりニアーから練習しようか！」

そう言うとりんリは腰の細剣を抜き、コハルに何やら姿勢のレクチャーを始めた。ウインドウを眺めていても何もはじまらないと思いい、とりあえず俺は直剣を実体化させて持つてみることにした。現れた直剣の見た目は、ただの金属の板に柄がついたものに見えた。一応両刃の剣ぼく板の淵は細くなるように削られているようだったが。

「あんまりカツコよくないなあ……までも、初期装備だからかな……」

そう呟きながら目の高さまで剣を持ち上げ、なんとなく辺りを見回す。するとモモがこちらへ走ってくるのが目に入った。

「わあああああ……あああ！蜂が追いかけてくるよおおおく！」

その後ろを蜂が結構なスピードで追っかけて来ている。



「えええ何したんだよ!?というかなんでこっちに来んだよ!」

思わず叫んでしまったが、思いの外的確にツツコみをいれている気がする。

「槍を回してたら蜂に当たっちゃってえええええそしたら怒ったみたい助けてええええ刺されたくない〜!!」

刺され……? 蜂自体が大きいので針というには太すぎるそれに対して刺すという表現は適しているのだろうか……えつと……いや、スルーしよう今はそこじゃない。というかこんなときレオは何してんだよあいつ!!

「とりあえず…この世界では刺されても痛くないから大丈夫! 槍で攻撃してみなよ!」

リンリが叫ぶ。 案外スパルタな指示がとんだ気がするのだが気のせいだろうか

「ムリいいいいい〜!!!!」

モモはそう叫びながらも着実に槍先の刃で蜂のHPを減らしはじめた。しかしその場で立ち止まってめちやくちやに槍を振っているだけなので蜂の攻撃もモモに全ヒットし、HPがじわりじわりと奪われてゆく。

「ちよつと加勢してくるね」

リンリとコハルさんに声をかけ、俺は直剣を握りモモの方へと一步踏み出した…そのときだった。

「モモオオハースううどいてくれえええええ〜!!!」

叫び声と共に大きな刃が降ってきた。

「うわあああつ!?!」

危ない……。大きな刃に見えたものは斧だった。どうやらレオは少し離れたところでイノシシ相手に斧を振り回していたのだが、手から斧がすっぽ抜けたらしい。そしてそれがモモと交戦中だった蜂に命中するというミラクルが起きたのだった。

「ナイスショット〜!でも、危なかつたね〜…」

モモがホツとした表情で笑っている。良いのか?…これで…いや…ええ…ええ…?少々呆れながらレオとモモを交互に眺めていると、後ろから更に呆れの色を濃くした声で話しかけられた。

「おいおい、オレよりひでえんじゃねえか?」

俺は少し驚いて振り返る。

「あなたは………」

声の主はリンリ達と合流する前、はじまりの街で迷子になっていた俺を助けてくれたクラインだった。

「よお! ダチには無事に会えたみてえだな!ぶつかつたよしみだ、おめえらもキリト先生のバトル講習に参加しとけ! な!」

そう言うくとクラインは明朗な笑顔を浮かべる。すると横から初めて見る青年が現れ

た。

「勝手なこと言うなよ……」

“キリト先生”と呼ばれた青年は、全体的に青みがかった黒色の髪をしていて前も後ろも男にしては長めだった。そのせいかな、明るく活発そうなクラインと比べると少々大人しそうな印象を受ける。

「いいじゃねえか みんなで盛り上がった方が楽しいだろう？」

きつかけは多少強引に思えたがキリトさんの指摘はとても的確で、コハルさんやクラインも含めて俺たち全員がスムーズにソードスキルを扱えるようになるまでにそう時間がかからなかった。

「みんな良い調子じゃないか、コツを掴んだらあとは反復のみだ」

心なしか、最初はあまり乗り気ではなさそうだったキリトさんも今は楽しんでくれているように見えた。

「うっし！オレも負けてらんねえな、鍛えに鍛えまくってやるぜ！と書いてえところだけど……そろそろメシ食わねえとなんだよな、ピザの宅配指定してっからよ」

今日の昼飯がサンドイッチだけだったのを思い出し、ピザがすごく羨ましく思えた。というか、腹減った…

「ほんじゃ、おりやここで落ちるわ マジサンキューなキリト！おめえらも、これからよろしく頼むぜ」

「こっちこそ、よろしくな」

「はい！またよろしくお願いします」

「クライン、またね！」

「ありがとう！お疲れさま」

「またよろしく頼む！」

「またねくクライン氏く」

各々が返事を返す。するとメニューウィンドウを操作していたクラインが首をかしげた。

「……………あれっ？なんだこりや、ログアウトボタンがねえよ」

「えっ?」

自分もメニュー画面を呼び出して確認するが、確かにログアウトボタンは見当たらない。

「うーんと……私のメニューにも出ないです」

そう言うと、コハルは俺に視線を向ける。

「俺も……みんなは?」

皆一様に首を振る。ログアウトボタンが表示された者は一人もいなかったようだ。

「今日はゲームサービス初日だからかな、こんなバグも出るだろ 今頃運営は半泣きかもなあ」

クラインがいたずらっぽいな笑顔で言った。

「そんな余裕かましていいのをお前? ピザの宅配頼んであるとかいわなかったか」

キリトさん、俺も同じこと思った。

「ピザかあゝ良いなあゝ!」

「だよなあ! オレも腹減った…」

「私もだけど今そこじゃないでしょモモ…レオ…」

……うん。リンリ、その夫婦のこと、任せたよ…

「冷めちやいますね?」

「えっそこ？受け取りは？」

「あつ」

ええまさかの…？コハルさんしつかりしてそうだと思つてたのにまさかの…？というか、俺まで釣られてピザ談義に加わつてしまつたじゃないか…。

「冷めたピツツアなんてネバらない納豆以下だぜ…」

ネバらない納豆つて何だよ…例えはよく分からないがクラインが落ち込んでいるということは分かる。

「ボタン以外にログアウトする方法つてないんでしょか」

華麗にスルーして話を本題に戻すコハルさん、君はなるほど…そういう立ち位置か。今まで沈黙していたキリトさんが答えた。

「マニユアルにもその手の緊急切断方法は一切載つてなかった」

「つつーことは、このバグが直るのを待つか誰かが頭からナーヴギアを外してくれるのを待つか、どっちかしかねえのか」

「いや…ただのバグじゃない《ログアウト不能》なんて今後の運営にも関わる大問題だよ」

キリトさんは何やら深刻そうな顔で考え込んでいる。

「それなのに運営からのアナウンスも緊急対応の動きもない…：妙だな」

リンリも眉間にシワを寄せて考え込んでいる。少々ピリつきはじめた雰囲気を知っていたのか、モモとレオも黙り込んでいる。

「問い合わせが殺到して対応が遅れてる……とか?」

コハルが不安げに質問を投げる。

「それなら原因がわかるまで全ユーザーを強制ログアウトさせるのが筋だ。一体何が……」

そのときだった。はじまりの街の中心にある鐘が揺れた。荘厳な音色が響く。それに呼応するように風が強くなり草がザワザワと揺れる。

「んなっ!?!」

クラインの足元から青白い光が現れ、それに包まれたクラインはその場から消えてしまった。

「なんだ!?!」

「きゃあっ!」

続けてキリトさんとコハルさんも消えた。何が起こっているんだ!?!驚いてリンリの方を見る。するとリンリは目を丸くしながらこっちへ手を伸ばしていた。

「待ってハー……………」

「うわっ!?!」

視界が青白い光に覆われてゆき、完全に覆われると同時にリンリの声が遠退いた。

再び視界が戻ると俺は物凄い人だかりの中に立っていた。これがもう少し整理された列になっていたら、施設名と所在地の県名が合っていない某有名テーマパークの開園を待つ人々の列を彷彿とさせただろうと思う。

「ここは……転移門広場？すごい数の人がいるよ」

「こりやあ全プレイヤーが集められてんじゃねえか？」

コハルにクライン、キリトさんと俺は近くに転送されたようだった。

「よかった……この広場大きいし、この雑踏の中離れたところに転送されてたら合流するの大変だったね……ってあれ、みんなは？」

リンリとレオはともかく、ある意味自由人のモモが少々心配だ。などと思っていると



俺のすぐ後ろの地面からあの青白い光が三つ噴出した。

「あつハース、皆さんも！」

「おおはぐれなくてよかつ…つてなんだこの人の数…？」

「びつくりしたね〜」

少し遅れて、リンリたちも俺たちの近くに転送されて来た。広場に集められた人々は突然の強制転移に加え、その先で何が起こる訳でもなく、徐々に苛立ちをつのらせていった。

「どうなってるんだ」

「早くしろよ」

などと不平不満を漏らす人々も徐々に増えてゆき全体が不穏な空気に包まれていく。

「あつ…上を見ろ！」

誰かが叫んだ。それを聞いた俺たちは空を見上げる。丁度広場の中心、時計塔の真上にポツと一つ、赤い半透明の六角形が点滅している。そこに映し出された文字は…

【Warning】  
【System announce】

少しホツとした。やっと運営からのアナウンスがあるのか…が、警告…？どういうことだ…？

「…なっ!？」

点滅していた六角形が不穏な機械音と共に空いっばいに広がり、赤く染め上げた。そこから粘性が高そうな赤黒い液体が溢れ出て数秒で顔の無い、巨大なローブ姿のアバターへと変化した。

「プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ……私の名前は茅場晶彦 今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ……」

茅場……？誰だよ、本名をわざわざ名乗るってことは運営のお偉いさんか……？

「茅場さんってSAOの開発者だよ、これって正式オープンのおいさつ……？」  
「えっそうなの？」

コハルさん、よく知ってるなあ……

「いや……茅場晶彦は今までメディアへの露出を避けてきた。ゲームマスターの役割だつて一度もしたことがないんだ、何故こんな真似を……!？」

静かだが、キリトさんの言葉からは切迫したものを感ずる。そのせいか、リンリたちも誰一人口を開く者はいない。

「諸君は既にメインメニューからログアウトボタンが消滅していることに気付いていると思う……しかしこれはゲームの不具合ではない《ソードアート・オンライン》本来の仕様である」

……は？本来の仕様……？どういうことだ？

「諸君は今後、この城の頂を極めるまでゲームから自発的にログアウトすることはできない」

茅場は淡々と説明を続けていった。外部からナーヴギアを停止・解除する方法は無いこと。それらが試みられた場合、ナーヴギアによって使用者の脳が焼ききられ死に至ること。それにより既に213名が亡くなったこと。俺たちナーヴギア使用者の現実の体は病院などに集められるということ…

「信じねえ、信じねえぞオレは…!」

意味が、分からない。あの明るいクラインでさえ、今は頭を抱えている。あのクールなキリトさんでさえとても感情を昂らせている。周囲の人々もみな一様に何かしら反応を見せている。しかし、意に返さず茅場晶彦は説明を続ける。

「ヒットポイントがゼロになった瞬間 諸君らのアバターは永久に消滅し、同時に諸君らの脳はナーヴギアによって破壊される」

これがトリガーだった。

「HPが0になったら死ぬだ!?!ふざけるな!!」

「そんな状況で百層を目指せるわけねーだろ!!」

言葉に出来ているだけまだマシだ。この人たちは“自分が死ぬ”という事象を総合して想像し、恐怖し、それを言葉として外へ出すことが出来ているのだから。放心状態

でも出来ない訳でもなく、現実を拒んで耳を背けている訳でもない。何でもぶちまければ良いというものではないが、少なくともストレスの捌け口があるということになる。

「それでは最後に、諸君にとってこの世界が唯一の現実であるという証拠を見せよう」  
茅場の言う通りにメニューを操作すると、手元にただの手鏡が出現した。

「……うおっ!? オレの顔になってんじゃん……」

クラインが驚くのも無理はない。手鏡の奥からこちらを見つめているのは「ハース」ではなく「蓮池 俊」だった。

「あれ〜? 私だね、この顔」

この状態でものんびりとしたペースを崩さないモモの声に少しホツとしながら後ろを振り返ると、リンリ、レオ、モモもいつもの見慣れた顔へと変わっていた。それどころか、体格まで現実の自分たちとほぼ同じように見える。

「コハルさんはあんまり変わってないね」

相変わらずザワザワとした広場の片隅で、俺たちはキリトさんが推測した「現実の顔」をアイコンクラウドで再現する方法の解説をきいていた。コハルのVRシヨップモールのアバターの話も相まって、この話はすんなりと頭に入ってきた。

「数値化されていても本物であり、命なんだと強制的に理解させるために茅場は俺達の

現実の体を再現したんだ……」

キリトさんが自分の手の平を見ながら呟いた。

「以上で《ソードアート・オンライン》正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の健闘を祈る」

茅場が言い終わると同時に、ローブ姿のアバターも、空の赤みも跡形もなく消えた。誰もが呆然とそれを数秒見守った。しかしその後が地獄だった。阿鼻叫喚とはまさにこのことだろう。様々な種類の叫びが広場の混沌を色濃くしている。

全てが終わわり、全てがはじまった日だった。

それから俺たちは、クラインの助けを借りながら地面に座り込んで青い顔をしているコハルを助け起こし、泣き出してしまったリンリの背をさすりながら広場を出てはじまりの街の商業区を目指した。キリトさんとはいつの間にかはぐれてしまったようだった。あとでクラインから聞いたのだが、キリトさんはもうこのときはじまりの街を出発していたらしい。

「もう……大丈夫。こんな時だからしつかりしなきゃいけないのに迷惑かけて、ごめんなさい」

コハルさんの顔色が少しよくなったと思う。リンリも泣き止んで多少冷静さを取り戻したようだ。

「無理もないヨ、こんなことになるなんて誰も想像してなかっただろうサ」

隣にいた金髪で小柄な女性が声をかけてきた。

「うおっ!?!どっからでてきた!?!」

その女性の名前は《アルゴ》といい、クラインとは初対面だったらしいが、それにしてはコミカルな会話が繰り広げられていたと思う。俺たちを元気づけようとわざと自然に振る舞ってくれていたのかもしれない。

「周りがパニックになると逆に冷静になるんだ。そつちこそ人助けとは余裕だな」

俺でなく、クラインに向けた言葉だというのはわかっていた。わかつていたがドキツとした。俺のこれは「冷静」というのだろうか……?特に何か不平不満を口に出すことはなく、やるべきだと判断したことをこなす。少なくとも合理的ではあると思う。何事も、色々とムダなものを削り落として残ったものが核・要点だ。今回の場合たくさんあるムダのうちの大半は「感情由来のもの」が多い。それだけ精神的にダメージを与える事柄が多く、また多くの人がその影響を受けたということだ。よって今重要なことは仲間の精神面のケア、それから次に「死なない為にみんなで強くなること」何故なら、現実世界で俺たちは死を身近に感じて暮らしていたわけではないからだ。敵の強さにもよるのだろうが、ある程度「自分はそう簡単には死なない」という自信がつけばきつと、精神的には今までの日常に近づくことが出来るのだろう。ただ……

きつとこの現状では、精神的に多少なりともダメージをくらっていることが「普通」なのだろう。「合理的に日常を。普通を求めて動く」ことが、捉え方によつては「異常」となるとは、なんて皮肉なことだろう。

「オレもそろそろダチのところへ行くぜ、広場で待つてるだろうからな」

「えっ……言っちゃうんですか……」

コハルが心細そうな声をあげる。

「前のゲームからの仲間なんだ。それにここじゃまだまだ初心者だからな、放っておくわけにやあいかねえよ」

「そう……ですよね……」

コハルだけじゃない、リンリやレオ、モモの顔からも微妙な感情が伺える。

「んな心細そうな顔すんなって、お前にやここに仲間がいるじゃねえか。おめえらも、なんかあったらオレを呼べよ！すぐ駆けつけてやるからよ。こう見えてもおりやあ他のゲームじゃギルドのアタマ張ってたんだ。いつでも頼りにしていいぜ！」

……ああ。きつと、そうなんだ。リーダーにはそういう、人情が必要なんだ。他にも必要要素はたくさんあるし、全て完璧に備わっている人なんていないはずだ。けれど

……

「んじゃあ、またな！」

各々お礼と労いを伝えると、クラインは仲間たちのところへと走って行った。

「……………」

「おい、どうした？ハース」

レオが俺の顔を覗き込む。

「いや、なんでもないよ」

俺は今自分の意思で、最善且つ最優先だと思うことをしているからここへいる。だが、それでも「ゲームじゃギルドのアタマ張ってたんだ。いつでも頼りにしていいぜ！」という言葉がひっかかる。胸がザワつく。そりゃ、会ったことが無いネットだけの付き合いと現実の友達とを比較すれば現実の友達を優先させても避難はされないのではないかと思う。それどころかこの浮遊城に來ているのか、なんという名前を使っているのかすら知らない現状では、連絡をとることすらままならない。それでも：あの環境を作り出し、維持してゆくために力をかしてくれた彼らが。協力して成し遂げたことも、助けられたことも、楽しかったことも、悩んだことも一緒に乗り越えた人もし…このデスゲームにいたら。

「報告だけじゃなく、せめてキャラ名くらい聞いておくんだったな…」

誰にも気付かれないうように、一人でそつと呟いた。



## 第四話

クラインを見送ると、アルゴさんが俺たちへ声をかけてきた。

「キミたち、これからどうするかあてはあるのか？」

「えっと……」

濁しながらみんなの顔を見るが、誰も何も思い当たることは無いようだった。それどころかやはり不安が顔に出ている。

「あてはくありませんね、今のところは」

いつものペースで、モモが答える。

「……………」

少しずつでも強くなるために：いや、死なない為に強くなることを目指して行動する段階へそろそろ移行しても良い気がするのだが、この状態でいきなりみんなをフィールドへ引つ張って行っても大丈夫なのだろうか？？主に、精神的に。

「そうか、これからどうする？どうしたい？ 街に閉じこもったまま来ない助けを待つカ、脱出するために動くカ 2つに1つだヨ」

そんなの、聞かれるまでもない。でも……………

暫くの沈黙が流れる。

「閉じこもっても何も解決しないよ」

沈黙を破ったのはリンリだった。

「私にはキリトさんや茅場晶彦みたいに機械のことはよくわからないけど、ここですつとHPを保って、リアルでは栄養や水分を点滴とかで体に補給されていたとしてもそれですつと生きられる訳じゃないでしょ……？ だったら、助けを待ただけじゃなくて、この世界でも出来ることをしなきゃ……！」

おお……俺も同じようなことを考えてはいたが、俺にはリンリのように仲間を鼓舞する物言いは出来なかつただろう。

「それもそうだね〜」

モモがいつもの調子で頷く。よし、良い流れだ。このままフィールドへ……

「……待ってくれ」

レオが神妙な面持ちで遮った。

「オレも、何か出来ることをしようという考えには賛成だ。けど……リンリとハースには悪いけど……状況が状況だけに、万が一のとき俺はモモの命を最優先に考えると思う。だから……ええと……」

「何言ってるの！ それはあつたり前でしょ！」

「そうだよ。それに、そんな状況にならないためにみんなで頑張ろうって話をこれからするんだろ？」

「そうだよ！私も、守られるだけじゃなくレオも、みんなのことも守るよー！」

……………。

あれ？まあ、良いや。リンリとさりげなく目配せをして話を進め：

「んじゃ、決まりだな！それなら最初に必要なのはコル……金だな」とにかく生きのこることを目標にして装備を強化するといいいヨ」

アルゴさんから教わった通り、俺たちは原始の草原で念入りに戦闘のやり方を確認しながらコルを貯め、装備を整えていった。

それから約2ヶ月が経とうとしている。

俺たちは4人で助けあいながら、なんとか「攻略組」と呼ばれるトッププレイヤーたちのすぐ後ろをつけるようにインクラッドの攻略を進めていた。コハルさんはクリスマス頃に「攻略組に入りたい」ということで俺たちとは別行動をとるようになっていた。

「もう四層まで登って来たんだね〜！2ヶ月くらいでここまで来られるなんて思ってたよ〜」

モモが風に長い髪をなびかせながら、第四層迷宮区付近の転移門前の草原に座りうっとり大きな湖を眺めている。その隣に座るリンリが続ける。

「ほんとだねー、あれから色々あったもんねー！クリスマスに、新年に……」

リンリの言葉を補足するように俺も言葉を続ける。

「その時々にも期間限定のイベントなんかも開催されたし、雪が降ったりもしましたし……もしかしてリアルにいた頃よりもこういう行事は満喫出来てるんじゃない？」

「ええそりゃねーよハースう！オレはなんかもっとこう……リアルならではの何か……」

「私はハースに賛成だな！クリスマスイベントの報酬だったサンタのAvatar、リアルで着るのちよっと恥ずかしいしあんな雪の中で着たら寒いなのっ」

「ぶはっ！」

リンリが膝を抱えて凍える真似をする。

動きはともかく、顔が真剣<sup>マジ</sup>過ぎて笑える。

「私もあんまり寒いのは得意じゃないなあ、新年の振り袖もかわいかった」

真剣な顔でガタガタ震えている人とはんわか思い出に浸っている人がならんで座っている光景は中々カオスだった。そのとき、

「おおっ!? 5層だ!! 5層に転移出来るようになってるぞ!! 攻略組がまたフロアボスを突破したんだ!!」

俺たちの真後ろ、転移門前に立っている男が叫んだ。

「えっマジ? 今日だったのか攻略: 俺らがここに来たときもう攻略組の人は見かけなかったよね...?」

「すごいすごい! 行ってみようよ!」

「ん〜いきなり? 突破されたばかりの最前線に...? 大丈夫かなあ...」

俺たちがこうしている間にも、何人ものプレイヤーが転移門へと消えていった。

「オレたちももう4層では十分戦えるんだし、大丈夫じゃないか?」

デスゲームに巻き込まれたと知ってから初めてはじまりの街を出るとき、一番危惧していたレオも今ではここまで自信を持てるようになっていた。

「だいじょぶだつて! まず様子見!」

リンリは完全にやる気になっていた。俺も新しい層がどんなところかは興味を惹か

れるがそうも言ってはられない。

「そうだね、自信をもつて！でも誰か一人でもこわいとか危ないと思つたら一旦撤退しよう」

一応釘を指しておいてから、俺たちは転移門で第5層へと向かった。

くく数分後くく

「なんつつつじやありやー！ー！！！！」

リンリが悔しさを全身で表現しながら叫ぶ。俺たちは意気揚々と5層のモンスターに挑んだものの、敵モンスターの予想外に高い攻撃力と確率の高い毒攻撃に慌ててトルバーナの街へと転移で逃げてきたのだった。そのまま転移門前の芝生に四人とも床に座り込んでしまっている。

「ビビったあああモモ、大丈夫か？二人も。圈内つて解毒もされるのか？」

レオが過保護になってきている。俺は最近、レオがモモに彼氏じゃなくパパ認定され

ないか少々心配だ。

「やつぱり、大丈夫じゃなかったね」

本人は相変わらぬのんびりとしているが、俺たちの中で一番安定して戦っていたのはモモだと思う。初めて槍を回したときにみせたセンスが更に磨かれているのもさることながら、5層のモンスターの攻撃力が今までとはケタ違いだということを即座に見極め、一度に複数のモンスターを相手にしないで済むように槍の特性である広範囲の攻撃を一切使わなかった。

「あはは……にしてもまさか、5層がさながらお化け屋敷とはね……」

俺は早朝や日中の休憩などの空いた時間に一人で狩りをしたり、そのおかげでさっき話に出た期間限定のイベントの報酬も少し多めに獲得していたため5層のモンスターもリンリやレオほどはキツイとは感じなかったが、モモのセンスと判断力の前では有って無いような差なのだろう。

逃げ帰る直前、俺はバランスを崩し偶然ミイラ型のゾンビの胸に手を突っ込んでしまったのだが、案外グチョツとかヌメツとかの気持ち悪い感覚も無く、腕はきれいにゾンビの体を貫通していた。ということはたぶん、モンスターの攻撃パターンを見た限り、ソードスキル→モンスターへ体当たりするように向こう側へ抜ける↓ソードスキル↓……というように繰り返せば一人でも5層のモンスターを倒せるのではないか。お

化け屋敷に出てきそうな怪物の体内に何度も全身で突っ込むという行為に躊躇が無ければ、であるが。

「あれ？ 俊しゅん？」

不意に後ろから声をかけられた。いや待て、今なんと言った…？ ハースじゃなく、  
俊リアルネームだ…？！ 驚いて即振り向くと…

「えっ…？！ 濡ぬれい？」

「は？ なんだ、知り合い？」

レオが興味津々に聞いてくる。

「こんなところで何してんのお兄ちゃん、地面にへたり込んでんじやってどんくさいなあ。てかアイコンクラッド来てたの!？」

うわあ…：俺が大学に進学してからあまり会わなくなっていたとはいえ、どうしてこ  
うも高圧的なのか…コイツは。今は物理的にも見下ろされている為仕方ないといえ  
仕方ないのだが。

「えっなに、ハースの妹ちゃん!？」

リンリが目を輝かせながらこちらへ駆け寄って来た。

「はい、蓮池 濡…：ここでは、ファレルという名前です。えつと…皆さんは…？」

ひよんなことから数年ぶりに実の妹と再会することとなった俺は、なんとなく居心地



の悪さを感じながらもみんなに妹を紹介した。

「ほー…なるほど、ご学友の皆さんでしたか！」

「ごが……？コイツこんな言葉使いだったっけ？するとトールバーナの噴水広場の方からまた新たな声が聞こえた。

「お〜いファレル！どうしたの？」

今度は誰だ……声がした方を見ると、薄紫色のショートカットの女性が歩いてきた。歳は俺たちと変わらなそうだ。

「あ。エマさんーちよつとヤボ用で」

「うおい……実の兄との再会をヤボ用って……」

「またあんたはそんな言い方して〜遠かったけど見てたからね！親しげに話してたでしょ！……つと、え!?兄!?!」

そう言うとき「エマさん」と呼ばれた女性はあからさまに俺を見てギョツとして後ずさる。

「えっ。あ、はい……そうですけど……?」

すると、俺の目の前でファレルとエマさんは後ろを向きコソコソと話しはじめた。

「ちよつとファレル、お兄さんって……いつもなにかと不幸な目や災難に出くわしてるといっ……?」

「そーですそーです。そりやもう呪われてんのかつてくらい…」

「やっぱりその人かー…」

「その人ですー…」

おい。見えてますよ、聞こえてますよ。百歩譲って妹はまあいいとして……エマさん？ 貴女初対面でしたよね…？ レオが俺にこつそり話しかけてきた。

「オイお前、妹に何したんだよ」

「はあ？」

何したつてなんだよ。なんもしてねーよ。どうやらファレル達の内緒話は終わったように2人同時にこちらへ向き直りエマさんが言った。

「ここで立ち話も何ですし、よければ私のアトリエへどうですか？ いつもはファレルと2人なので6人だと少々手狭に感じてしまうかもしれないが…」

な………なんだその笑顔は。今さら取り繕ってもムダだぞ。ここで!! ついさっきまで!! 後ろ向いて何を話してたお前らは!!

「アトリエ!? すごい!! 見たい!!」厄介になろうよ!! ね!? みんな!!」

「賛成〜! 私も見てみたいなあ」

あつ…嬉しそうなリンリとモモ…。これは行く流れだな………うん。

「ふふ、ツールバーナの外れなので少し歩きますがどうぞ、こちらです」

そう言うとエマさんとファレルは歩きだした。俺たちもその後が続く。

「アトリエって何作ってるんです？絵とか？」

正直、前を歩く2人にあまり良い印象を持ってはいないが、そこは大人の対応としてなんとか場をつなごうと試みる。

「絵?!いやいや何をおっしゃいますか〜!彫刻ですよ!あんな虚像と一緒にされては困ります!」

さっきの笑顔のままサラッとハードな言葉を吐くんだな、この女。

「…虚像?」

「ええ。実像としてあるもの、質量があるものをわざわざ平面に表現するなんて嘘も方便もいとこですよ〜」

…なるほど、ファレルと一緒に居られるだけあるな。これは。なんとというか……一言で言うと、嫌いだ。

「なるほど〜?でもあれつすよね、絵画も時代によって、元は現実をそのまま写すもの、写真の代用みたいな役割から現実ではあり得ないフィクションを描くように変化していった面もありますし、そこが良さでもありますよね〜」

いつぞやの講義で聞きかじっただけだから深追いしないで貰いたい……が、だったら何故言った!?俺。

「あはー。……………ハースさん…と言いました？お主、絵描きだな？」

うわーお……………たまにいるよね、笑顔が怖い人。目が笑つてない人。つかそこまで絵を目の敵にします!?!ホワイ!?!

「フツ……………そう言うお前は彫刻家だな?……………さつき聞いたことだけだ」

なんとなく嫌いな上に笑顔が怖い人はもつと苦手だ。頼むつ……………この雰囲気を打破してくれ渾身のおふぎけモード……………!!

「あの一……………いい加減にしてもらつて良いですかー、年上2人。着きましたよ」

おまつ……………まさかフアレルいもうとにここまで感謝する日が来るとは…。

あとでレオに聞いたことだが、このときリンリとモモは後ろの方でアトリエへの夢の空想を繰り広げ、前の方では俺とエマさんが彫刻vs絵画でバチバチしていたので、それに挟まれたレオの心中は焦り以外の何物でもなかったらしい。

それから暫くアトリエ内で話をしたり、作りかけの彫刻を見せて貰ったりしながらお茶を飲んだりと比較的和やかな時間が流れた。

ちなみに2人はこのデスゲームがはじまった翌日にはじまりの街の路地裏で偶然出会ひ、フアレルが持っていた石ころをエマさんが欲しがったため一緒に狩りへ出かけることになり、なんとなくそのまま共同生活をするようになったらしい。

俺はどうにもエマさんのことが気に入らないが、妹の生活を助けてくれているということもあり一応お礼を伝え、頃合いを見てアトリエを出た。リンリたちはいつの間にか随分仲良くなっていたようだが。

ファレルと会ってから1ヶ月半ほどが経った頃、俺は相変わらず早朝は一人で狩りをしていた。5層モンスターの攻撃を体当たりですり抜ける感覚ももう慣れてきた気がする。丁度10体目のゾンビを倒したときだった。

「ハース!!」

呼ばれた方を見ると、コハルが笑顔で走り寄って来た。

「久しぶりだね!どうしたの?一人?」

「久しぶり、元氣そうで良かったよコハル」

……っ!?

「えっ?なにどうしたのハ…」

「シッ!」

俺たちがいる石畳のフィールドから川を挟んだ反対側の荒野のフィールドに2人、武器を構えて対峙しているのを視界の端に捉えた。そのため俺は思わずコハルを引っ張り物陰に隠れた。それに気付いたらしいコハルがこっそりと話す。

「何…あれ…ケンカ!?!」

「いや、それにしても動きが無さすぎるよ…」

よく見ると、その二人はプレイヤーを示すグリーンカーソルで黒っぽい服と赤っぽい服を着ているようだった。それ以外は薄暗くてよく見えない。黒っぽい服の方は気を抜くと見失ってしまいそうなほどだ。

「でも…この世界でもしもHPが0になったら…何が何でも、止めなきゃ…!!」  
今にも走り出しそうなコハルの腕をしっかりと掴み引き止める。

「待って」

すると赤っぽい服を着た人が武器を下ろしその場に座り込んだ。そつと黒っぽい服の人物がそれに近付く。暫くするとそのまま焚き火をはじめた。

「…何かの練習だったのかな?」

コハルが呟く。

「さあ……にしても、何のだ？ 最前線まで上がって来られる実力者が今さら基本の構えを教わるなんてことはないだろうし……」

としたら、PvP<sup>対人戦</sup>………いや、それこそコハルがさつき言っていたじゃないか。絶対に止めないと。この閉ざされた世界で暴力が全てを支配するようになってしまえば攻略どころではなくなってしまう。

その日は狩りを早めに切り上げ、コハルとも別れすぐにみんなの元へと帰った。いらぬ不安を与えてしまうのではと、5層で見かけた黒と赤の二人組のことはみんなには話していない。

## 外伝 上

夕日が街を赤く染めている。日が完全に落ちる前に狩りを終え、宿屋や食べ物屋を目指す人々の喧騒から逃れようと、俺は石段を登り転移門へと進む。特に行く当ては無かったのだが、ふと和風出汁の風味が恋しくなり第十層の城下町へと向かう。

今攻略中の最前線は第十二層で、そこから二つ下のフロアとなったこの千蛇城下町は徐々に人気が少なくなってきた。たまに見かけるプレイヤーの姿は、低層からの観光客か、HPリジエネの効果が得られる団子を買いに来た上層プレイヤーか、といったところか。

「確かに、十層で安定して戦える戦力があるならもつと上の層で狩りした方が良いもんなあ……」

誰にともなく呟く。しかしもう俺には関係の無いことだ。転移門を出てすぐの階段を降りると右手に定食屋が見えた。店主兼クエストNPCの青年が店の前で出迎えてくれたので軽く会釈して店内へ入る。店の中は町並みの時代に則した大衆食堂といった雰囲気壁一面に品書きが貼られ、奥にあるカウンターっぽい調理場からは湯気と共



に美味しそうな匂いが立ち込めている。品書きを眺めながら適当に一番奥の席へと座る。

「うーん……………ん!?…え。千蛇唐揚げって何だ…百足丸揚げは分かる。どつちも食べた  
く無いけど…けどさ……………十手揚げだあ…?」

十手揚げって何だよ…武器じゃん…ゲテモノの枠通り越したよついに…千の蛇、百の  
足、十の手……………?いや考えるのやめよう。これこそ蛇足だ。

どんな料理かを想像しようすると恐くなるメニューは避け、無難に味噌カツ定食を注  
文する。自動で代金が支払われ、調理場が少々騒がしくなった。俺の他には誰も客がい  
ないので十中八九味噌カツ定食を用意してくれているのだろう。

ふと店の外に目を移すと、夕日はもう僅かしか見えていなかった。それとなくそのま  
ま視線を上へと移す。

「……………全部で、百層か…」

さつき俺は『今攻略中の最前線は第十二層』と言ったが、第十一層が突破された  
のはつい数時間前のことだ。その知らせはもう全プレイヤーに周知されているはずな  
ので俺が知っていてもなんら不思議なことには無いのだが

「俺は弓だったからまだ良かったけど、やっぱり近接武器の人たちは回避ミスに気を付  
けないと大変そうだったな…特に、回避タイミングを間違えると必中な上に確率で麻痺

くらうやつとか：」

第十一層が突破されたことだけでなく、フロアボス《ザ・ストームグリフィン》の攻撃パターンを知っているのは、俺がそのフロアボス討伐レイドに参加したからだ。レイドを構成した《攻略組》と呼ばれる奴らの中にはキリトやアスナ達、キバオウをはじめ顔見知りが何人かいるし、仲間とはじまりの街を出たときから一緒に強くなってきたコハルもいる。他にも、色々なギルドを転々としていた頃に見た顔もチラホラ……。その人たちは今も第十一層なり、十二層なりで奮闘しているはずなのだが、俺は今ここでポーツと味噌カツ定食を待っている。端的に言うると逃げてきたのだ、命が消える瞬間を恐れて。無論、自分の命もそうだがそれよりも恐ろしいのは、誰かの命が自分の目の前で消えることだ。元々一人でフラフラするのが好きな性格も相まって《攻略組》や《ギルド》などの、危険性が高いチャレンジを強いられる環境や集団・仲間という関係から離れたくなったのだと思う。何かの漫画に出てきそうなキザな言い方をすれば、自分から全て手放してしまえば失うものも無くなる」とかそんなところではないかと思う。なんとなくこれじゃいけない気がしなくもないのだが、今は存分に逃げることにする。もう決めた。

「ほい、味噌カツ定食お待ち」

いつの間にか、いかにも料理人っぽいおっさんが料理を運んで来てくれた。

「どうも。いただきます」

味は悪くなかった。アインクラッドの食べ物は何れもどこか現実にあるような無いような不思議な味が多いのだが…今になって思う。あの味噌の原料って何だろう、アインクラッドに大豆あるのか…？それと、あれは何の肉のカツだったのだろう。

食事を終わると外はすっかり暗くなっていたのでこのまま城下町の宿屋で休むことにした。確か町の西端に一軒、南に一軒あったはずだが、南の方の宿屋は門もついで西よりは豪華そうだったのを思い出して南の宿屋を目指す。程無くして見えてきた門をくぐろうとしたときだった。

「待てえ!!盗人!!」  
ぬすっと

咄嗟に弓に矢をつがえながら声のした方を見る。右前方に見える大きな木、その向こうにいる黄色い着物の町娘が叫んだようだった。そこからこちらへ物凄いスピードで走ってくる男と目が合った。

「邪魔だどけえっ!!」

男が叫びながら右手に握った短刀を振りかぶる。

「…………っ!!」

くそっ…間に合わない!!弓の特性上、近付かれたら何も出来なくなってしまう。俺は男の斬撃を避けるために右へ飛び込み回避しながら男の足元に自分の左足を目一杯のばす。それに気付いた盗人は少しバランスを崩しながらも踏み留まり逃走を再開した。

「チツ…」

せめて転べよっ!!と心の中で毒づきながら追いかけてようと即体勢を戻す。すると目の前に屋根までのびる梯子があった。それを見てハツとした。追いかけてどうする?今しがた接近されて何も出来なかっただろう。弓の特性は…?

「そうだ、この人<sup>ひと</sup>気の無さなら…!!」

俺は即座に梯子を駆け登った。屋根の上に立つと、逃げた男は通りすがりであろう何人かの町人たちに追いかけられながらフィールド《夜藤の河原》へと続く街道を走っているようだった。

「( )から…25mくらいか」

溜めスキルでもソードスキルの最大射程は30m程なので、溜める時間を考えるともうあの男に命中させるには通常攻撃しかない。しかし通常攻撃はシステムアシストが

得られない為命中するかどうかは完全にプレイヤーの腕次第ということになる。

「……………っ!!」

無音の気合いと共に矢を放つ。もしこの城下町がまだプレイヤーで賑わっていたならこんなことは出来なかった。圈内だからHPは減らないとはいえ万が一他のプレイヤーに当たればトラブルは免れない。次の矢をつがえながら最初の矢の行く末を見守る。

「…外したか」

予想より男が速く、どうも俺の放った矢は空を切りそうだと考えた瞬間、外れたと思つた矢は男の踵かかとに命中した。すると男が膝から崩れ落ちた。流石に今度は転んだようだった。

「うっわあ…足が速くて踵で止め、アキレウスかつての」

俺は自分が何の躊躇も無く男の頭か上半身を狙っていたことに気付き複雑な気持ちになりながらも男を取り押さえようと屋根から跳び降りた。それより先に、追いかけて来ている町人たちが盗人の男を羽交い締めに行っている。その中の一人が俺に気付いて振り向くと、俺が手に握ったままだった弓を見て言った。

「盗人の足を射つたのはおめえか！急所を避けて足の腱を狙うとあ大したもんだ！俺たちあコイツを奉行へ突き出して来るからこの巾着を宿屋の娘さんに返して来てくれ

ねえか？」

い、いやいや…そんなこと毛頭考えてなかったよ…というかバリバリ頭とか狙ってましたよ…と、心の中で呟くが、町人の頭上に「クエスト」マークが表示されていることに気がついた。

「…え。…：…わかりました」

一瞬このクエストを受けようか迷ったが今後の予定がある訳でもなく、強いて言えばあの宿屋に用があつたので、その側にいるあの町娘が目的地なら一石二鳥だと思ひ受注する。

宿屋の前まで戻り、大きな木の裏にいる黄色い着物の町娘に巾着を届ける。隣の青い着物の町娘とは親友のようだった。

「ありがとうございます!!この巾着はここにいる友人のハツと同じものを揃えた宝物だったのです!!…」

あれ…ハツ…？おハツさん…？確かコハルやクラインたちと第十層攻略のときをやったクエストにもそんな名前の人がいいたような。

「…もう夜も更けてきました、お礼も兼ねて是非うちの宿屋に泊まって行ってください

！

！ この展開は願ったり叶ったりだ。ただのおつかいクエストだと思っていたが宿泊料金の割引と加してもらえないかもしれない。

「お言葉に甘えて」

宿泊料金の割引どころの話ではなかった。一番奥の最上の部屋：かと思つたがそうではなくどうやらインスタンスマップになつていようで、文字通り「貸し切り」状態の部屋へと案内された。しかも広い。語彙力が乏しくて上手く説明出来ないがとにかく広い!!景色も良い!!

「すげー…<sup>リアル</sup>現実でこんなところに貸し切りで泊まろうと思つたら一泊いくらかかるんだろう…」

予想外の待遇にテンションが上がって色々見て回っていたが気付くともう夜中の1時を過ぎていたので大人しく布団で休むことにした。

翌朝、クエストログが進む呼び鈴で目を覚ます。

「んう……はあ？……クエストお……？」

進行中のクエストなんてあったらどうか。眠い目を擦りながら考える。

「あ、考えてないでログ見れば良いか」

するとそこには、『訪ねて来た客人に挨拶をしよう』と記されていた。

「……………小学生かよ」

何故朝からクエストログにツッコまねばならないのか。少々不服に思いながら身仕度を整える。今まで気にしていなかったが、ガッツリ和風で落ち着いた雰囲気の中でモロ洋風の真つ青なフォーマルチックな服装の組み合わせというのも中々見られるものではないのではないかと思う。そんな下らないことを考えていると襖の外から声を掛けられた。

「おはようございます、起きて居られますかな。先日は娘がお世話になったようで私からもお礼を申し上げます。それと、貴方様に御用向きのある方がいらしていますがいかがいたしましょう」

声の主は宿屋の主人なのだろう。

「おはようございます。はい、今行きますねー」

適当に返事はしたが、わざわざ訪ねて来られるようなことをしたのは覚えはない。まさ



か昨日の一件について話を聞きたいとかで奉行所へ来いとかいう話だったらどうしよう、めんどくさそうだ：と少々憂鬱な気分になる。

最後に装備した弓のチエツクをしてから襖を明け宿屋の中心付近にある、宿泊客共用の休憩所のような部屋へと向かう。いつもの晴れの日と変わらない朝の日差しのはずだが、宿屋の雰囲気の違いか今日は一段と気持ちが良い。休憩所の部屋へ入るとすぐに宿屋の主と若い男が何やら親しげに話しているのが目に入った。

「お待たせしました、遅くなつてすみません」  
主に話しかける。

「ああいいいえ、お気になさらず。それよりもこちら、小次郎さんが貴方にお話があるとのことだ」

小次郎：？誰だよ。小次郎と呼ばれた男は紺色の短髪に鼠色の和服の青年だった。どこかで見たことあるような気はするのだが、誰だったか：全く分からない。

「よおー、朝つぱらから悪いなア！昨晩は手柄だったな！その腕を見込んでお前さんに頼みたいことがあるんだがここで話すのはなんだから俺の店まで来てくれねえか」

段々目が覚めてきて気付いたが、これは昨晩単発のおつかいクエストだと思つて受注した巾着を届けるという内容のクエストの続きらしい。単発のおつかいで済むのなら町娘や宿屋の主にお礼を言われた時点でクエスト報酬が受け取れているはずなのだが、

それは無かった。更に新たな課題が続々と追加されて話が展開しそうになっていく時点でこれは単発のクエストではなく長編のクエストになるのかもしれないということが分かる。まさか第三層から第九層にかけて展開されたエルフのクエストほどのボリュームでは無いただろうが。あまり長くなるならクエストを破棄しようかとも考えたが、ここで辞めたらただ豪華な部屋で数時間寝る為に宿屋の娘の巾着を取り返したような、恩の押し売りをしたような気分になって後味が悪そうなのでとりあえず続行しようと思う。

「わかりました、俺に出来ることならだけど」

それを聞いた小次郎はニツと笑い宿屋の入り口まで歩いて行つた。すると宿屋の主が言った。

「おやおや、もう行かれるのですか。昨晩は本当にありがとうございました、お代は結構ですでお気をつけていつてらっしゃいませ」

思わずギョツとしてしまう。………は？なん………だと………？タダ？あんな凄そうな部屋を貸し切り状態で使えたの？本当にクエスト続行させてよかつた……。そう心の中で呟きながら宿屋の主と娘さんに挨拶をして小次郎の元へ向かう。

## 中

「お待たせしました」

戸口に立つ小次郎に声を掛ける。

「おう、悪いな。じゃ行くか」

スタスタと歩き始める小次郎の後ろについて行く。服装からして、さっきの話にもあつたようにコイツは商売人なのだろうがフランクな口調の中にも微妙な気品が溶け込んでいてどことなく雰囲気か掴めない。

「(ト)だ」

「へ？」

早過ぎやしないか、ついさつき宿屋のところの門をくぐって街道へ出たばかりだ。俺のわずかな戸惑いを無視して小次郎は店へと入る。その店の軒先にはでかかど看板が下がっている。《千蛇呉服店》

「(ト)………!？」

呉服屋……百貨店の基礎だったりするやつだよね……ええ……?なるほど、微かな気品はそういう……

「おい、何してる。早く来いよ」

わずかだった戸惑いが大きくなっているのを知ってか知らずか、小次郎は俺の腕を掴み店の中へと引き込む。すると外をキョロキョロと確認してからそつと扉を閉め、店の奥まったところにある階段から二階へと上がってゆく。二階は和風の大広間が一つあるだけだったのだが、障子が少なくまだ午前中だというのに少し薄暗かった。少々嫌な予感がする。

「えつと…?」

「単刀直入に聞こう、おめえくしなだぐみ櫛名田組に入る気はないか?」

やっぱりー…!!…つかなんだよそれ!ヤクザですか!?!断ったら殺されるやつかな何かな!?!いやでもNPCだし…モンスターに変身とかしちゃう系だったり? しちやいますうー?…なんだこのテンション。

「く…櫛名田組…とは…?」

どうにか時間を稼ごう、そのうちになんとか…

「ああー?見慣れねえ顔だと思っただがおめえそんなことも知らねえのか?櫛名田組といやあこの千蛇城下町の治安を守る筆頭だあよ」

…は?今何と?

「……………へっ?」

「だから、治安組織だ」

「……………あれ？ヤクザじゃないっぼい…？けど…」

「俺はその代表、局長の櫛田小次郎だ」

「……………あつ分かったぞこれ新撰組的なやつかな？鬼の副長…じゃないや怖い局長…無理矢理だけど響き似てるし。」

「あ、ああ…見廻り組的な…？」

「ああ!?見廻り組なんぞと一緒にすんなボウズ!!」

「ボウズ!?…いや…ええ？違うの…？もうちよつと日本史勉強しとくんだった訳が分からなくなってきた…」

「あんなスカしたイケ好かない連中なんぞ…とまあいい。しかしおめえ…櫛名田組を知らねえで見廻り組を知ってるとおそういうことか…？」

あ。やべえ。今度こそやべえやつだこれ。

「違います違います!!俺は昨日食事をしに城下町へ立ち寄っただけでそれまではこの上の層で戦ってました!!」

「…そうか。だが、だとしたら上へ登れる奴が何故こんな平和ボケした町で油売ってる」

「それは…」

NPCのくせに痛いところをついてくる。思わず言い淀んでしまう。

「まあ良いさ、行くあてが無いんなら櫛名田組オレたちの仕事を手伝ってくれても構わねえぞつてだけだ。組員じゃなく見習いならいつ辞めても構わねえしな。その気になつたら声をかけてくれ、俺は下にいるからよ」

それだけ言う和小次郎はさつきと下の階へ降りて行つてしまった。何この展開……つかれる……精神的に。雰囲気や話の展開にビビッてしまったが話によるとここは「平和ボケした町」だそうなのでそこまでハードなクエスト内容ではないだろうと思ひ、俺は小次郎たちの仕事を手伝うことにした。

「あれ……でも櫛名田組の仕事なんだ、店の仕事じゃなくて」

あれかな、一応治安組織ではあるんだけど町が穏やか過ぎてそれだけじゃ生活が成り立たないからカモフラージュの意味も含めていつもは商売やつてるみたいだな、某有名時代劇「必〇仕事人」的な……少々引つ掛かるところはあるが小次郎を探しに俺も下の階へと降りる。

「あの……俺にでき……」

小次郎を見つけ声をかける。なにやらいくつかの反物を棚へとしまつてるところらしい。

「おう、言わなくても良いぜ待つてな」

せめて最後まで言わせて……。しばらくすると小次郎は奥から何かを持って来て俺

に手渡してきた。

「まずそれに着替えろ、おめえのその真っ青な格好はいくらなんでも目立ち過ぎる」

渡されたものを確認するとウィンドウがポップアップした。《海松茶色の着流し：町人》×1、《萌葱色の帯》×1

「…町人」

眩きながらそのアイテム類を装備フィギュアへと移動させる。一瞬で着替えが終わる辺りこころ辺は現実世界よりも楽だ。

「おうよ。百姓にしてはお前はヒョロっこくて白過ぎる、逆に不自然だ。こっちに來い装いを整えてやる」

有無を言わず店の奥へと拉致される。これ以上何があると言うのか、帯曲がつてたりする？

「はいれでよっ」

小次郎は満足に鼻を鳴らす。どうやら髪型と髪色を弄られたらしい。鏡を見て唾然とする。

「なんだこの…大分大人しくなった遊○王みたいいな…」

茶色かった髪色は落ち着いたトーンの黒に近い焦げ茶に変えられていた。渡された着流しの色にもこの方が合うと思う。しかし問題はこの髪型である。逆にこの方が目立つだろ!!と内心でツツコみを入れる。

「ん?何か言ったか?」

「い、いえ何も…」

あとでこっそり自分で少し直してみよう。にしても、耳たぶの辺りまでしかなかつたもみ上げが一瞬にして顎の辺りまでのびている辺りここはどんなにリアルでも仮想世界なんだと実感させられる。

「それとーあーうーむ……………よし、時雨しぐれだ」

「…は?」

すると聞き慣れない効果音が聞こえたが何か変わった様子は無い。後で他の組員らしきNPCに聞いたのだがどうやら櫛名田組に入ると皆一様に本名とは違う名前を宛がわれるらしい。スポーツチームで希にあるコートネームのようなものだと思う。

「早速だが時雨、この暖簾のれんを隣の千蛇酒店に届けて来てくれねえか」



またおつかい系クエストかあ…分かつてはいたが、そろそろただ歩くのにも疲れて来た。

「わかりました、行つてきます。」

相も変わらず人気の無い街に出る。酒店の店主に暖簾を届けるとそのまま取り付けもしてくれとのことだったので店先で作業を始める。すると遠くの方から元気の良い声が聞こえた。

「うわあ~~~~!!!見てみて!!ほんとに江戸の町みたい!!春になったら桜とか見られるかなあ!?!」

…?…なんだか聞いたことがあるような…

「ちよつと待つてよユウキ!!圏内だから安全とはいえ置いてかないで!」

ユウキ…?…つて確か…

「やーだよー!!観光に行こうつて誘つてくれたのリーファじゃ…:…あれ?」

さつきまで遠かつた声が俺の背中 of のすぐ後ろで聞こえた。…速くね?こ、これは挨拶するべきか…?いや、普通に六層では一緒に攻略したんだから挨拶しない方が不自然か。

「よ…」

「お兄さん、プレイヤーだよね?」

…ん？なんだこの…よそよそしい反応は。まさか…忘れられ…？

「そ、そうだよ」

「えーと…S、h、i…：…しぐ…：しぐれさん？」

…あれ？なんでユウキがそれを？と思ったのもつかの間、自分のHPバーの横を確認してハツとする。今までH e a r t hと綴られていたところに今はS h i g u r eと記載されている。しかも通常の白色ではなく、薄い黄色で。

「う、うん」

「読み方あつてた！名前の色黄色いけど、どうしたの？クエスト中？」

「うわあすみません！初対面の方にいきなり色々聞いたら失礼でしょ！」

後から黄色いポニーテールの少女が走ってきてユウキを小突く。リーファという名前の…キリトの妹さんだったような。

「えーそうだっけ？ボク、なんだか前にシグレさんと会った気がするんだけどなく…」

うっ…：鋭い。別に隠してする必要はないのだが、キリトたちと最前線で戦っていた俺がこんなところでクエストをやっていると知られれば、特にリーファにはいらぬ心配をさせてしまうかもしれない。

「そうかい…？人違いじゃないかな、ごめんね、えーと…ユウキ…さん？」

この時ばかりは、髪から服まで替えをくれた小次郎に感謝した。

「えつと……二人はどうしてここへ？」

……何をしてるんだ俺は。せつかく追求をかわしたんだから早急にこの場を離れるべきだろうに。

「私たち、攻略組を目指してるんです」

リーファが凜として言った。

「ねー！リーファはお兄さんが攻略組でね、早く側で自分も一緒に戦えるようになりた  
いって聞かなくてさー！ボクも、頑張つて闘つてる人たちがいるなら手伝いたいって  
思つて！」

今度はユウキが笑顔で答える。

「っ……………」

眩しい。そして懐かしい。まるで数カ月前の自分たちを見ているようだった。レオ  
の真つ直ぐさを、モモの優しさを、リンリの強さを。

「それは……それはとても立派なことだと思うよ。でも……でもね……」

どうも、言葉に出来ない。俺は……俺はこの子たちに何を伝えたいのだろう。危ないか  
らやめておけ？いや、違う。俺も連れて行つてくれ？違う。そんなことじゃない。

「お兄さん……？大丈夫……？」

いつの間にかうつ向いていたようで、心配そうに覗き混むユウキと目が合った。

ああ、情けない…。

「ごめん、大丈夫。なんでもないよ」

精一杯笑顔を作り、二人を見る。ちやんと笑えているだろうか

「攻略組かあ…頑張つてね、くれぐれも気をつけて」

どうにかそれだけ伝えると、今日は城下町の観光がてら街の近くで狩りをしに来たという二人を見送つて暖簾を取り付ける作業に戻る。

## 下

暖簾を取り付け終わると酒屋の店主に挨拶をしてから呉服店に戻り、小次郎へ報告する。

「ご苦労だったな、もう飯だお前も食え。その後は鍛練だかな」

そう言う和小次郎が井と箸を差し出して来るのでとりあえず受けとる。

「鍛練……？」

「ああ、お前には言つて無かったか。櫛名田組オレたちはいつも午前は仕事、午後は各々得物の鍛練をするんだよ」

なるほど……？ なんだらう、午後はモンスター討伐系のクエストに切り替わるとかかな？

「んむうつ?!?……うえつ……」

何井だよ、これ。甘ったるい綿菓子をご飯の上に乗せたような味がした。

「お前の得物は何だ？」

井をなんとか平らげた頃、小次郎が俺に尋ねてきた。左手で背中から弓を引き抜き目の前へ差し出す。

「まあ、分かっただけだ。ついてこい」

店の裏口を出ると運動場のような広場に出た。そこには丸太相手に居合いの練習をしている人たちがいたり、空手の組み手のようなことをしている人もいた。小次郎の言葉通り、組員たちは皆ここで武芸の練習をしているようだった。それらを横目に奥へと進むと、広場の一番端に的がいくつかぶら下がっているのが目につく。弓の練習はあそこでするのだろう。その後は日が沈むまでひたすら矢を放ち続け、定食屋で夕食をとつたら宿屋で寝た。

それを繰り返して約一ヶ月と数週経った頃だった。いつもの通り午後の鍛練をはじ

めようと、俺は本日一本目の矢を弓につがえた。

「おめえ、本当の得物は何だ？」

後ろから小次郎が話しかけてきた。

「…え？」

「弓も筋が良いとは思いますが、お前元々は剣士だったんじゃないのか？」

「な……………」

思わず絶句してしまった。確かに俺は以前片手直剣をメイン武器としていた。しかしそれはもう何ヶ月も前の事で、小次郎と会ってから…いや、最初に第十層を訪れた時ですら直剣に触らなくなつて数ヶ月経っていた。それなのに何故小次郎がそのことを知っている？

「凶星か」

小次郎がニイツと笑う。もしかして…

「他人の武器熟練度が見えるのか？」

そうとしか思えない。弓の熟練度も26までは上がってきたが直剣の熟練度は30にまで達していて、俺が取得している熟練度スキルも直剣カテゴリのものが一番多いのだ。

「まあそんなところだ。…お前、何故剣を置いた？」

ああ。この話の流れなら聞いてくると思ったよ。

「……もう忘れたよ」

何事も無かったかのように弓を引き絞る。

「なら、何故次の得物に弓を選んだ？」

放った矢は大きく逸れて的の脇にある茂みへと消えた。

「……単独行動をしても、比較的安全に戦えたから」

「安全だあ？ 弓使いは近付かれたら何も出来なくなるって自分でも前言ってなかったか？」

「近付かれる前に、倒すか逃げるかするんだよ」

「くだらん」

「……なんだと？」

「聞いて損だったと言ったんだ」

「……弓使いでもない貴方に何が分かる」

「何使いだろうと同じことよ。周りをよく見て、足並みを揃えられる奴が仲間の勝利の為に故意に一人距離を置くことを単独行動つつうんだ。だからそいつの行動は有意義なものになるし、万が一危機的状況に陥っても仲間が助太刀に入れるんだ。おめえのはただの孤立だよ。」



「…………… ああ」

きつと、心のどこかでは分かっていたことなのだと思う。仲間とスイッチを重ねてこそ効果を発揮しやすい熟練度スキルを多く持つ直剣を、色んな思いと共に頑丈に蓋をして心の奥底にしまいこんだ。それ以降、俺は人と深く関わることを恐れている気がするのだ。以前はこんなことはなかったはずなんだ。剣を握り仲間と肩を並べていたはずなんだ。しかしそれはある日出来なくなってしまったのだ。俺の判断ミスのおかげで俺は失敗したんだ。おまけに、そのとき出来たことといえば仲間を信じることだけだった。…いや、それも違う。俺は…信じたんじゃない…絶対に止まってはならない時に、混乱と恐怖で動けなくなってしまったのだ。それをフオローしようと仲間が動いた。彼らは俺を信じていたから。でもそれを俺はただ…止まった思考を抱えながら眺めていることしか出来なかったんだ。信じることすら出来なかった。その後悔から直剣なかまと深く関わるのを避け、恐れるようになったんだ。

「……………う」

矢が一本ものに当たらない。今までどれだけ調子が悪くても1／5本の確率程度には的を射抜けていたのに。

「おい、もう今日は休め」

小次郎が普段より少しだけ柔らかい声音で言った。しかし俺はそれを無視して矢を

射続けた。

その夜、どうも考え事をしてしまい中々寝付けずにいた。リーファとユウキはどこまで攻略を進められているのだろうか。攻略組の面々は今どうしているだろう。一人で最前線に残ってきてしまったコハルは大丈夫だろうか。現実世界からの救助はやはり無いのだろうか。ソードアート・オンラインをプレイする直前に閉鎖へと向かっていた俺が消えたあのギルドはどうなっただろう。直剣をまた握ろうと思える日は来るのだろうか。

「前も思ったことあったけど、小次郎<sup>アイツ</sup>ほんとにNPCかよ……」

ここでの生活も潮時だろうか。榊名田組は大きな農家の次男坊や俺のような流れ者など様々な人間を受け入れているので、集団のわりには個々が独立しているためかとても自由な雰囲気があり気楽だった。しかし第百層攻略を目指しているプレイヤーの一人として、いつまでもここにはいけないのではないかとも思う。それに直剣のこと

を小次郎に見抜かれてしまったのも少々居心地が悪い。

ちなみに「櫛名田組」と同じ千蛇城下町の治安組織、「見廻り組」は武家出身の人間のみで構成されていて簡単に言うところ「武士のメンツ」やらなんやらで櫛名田組を見下し、厄介者扱いをしているということもここ一ヶ月の間で理解した。

翌朝、いつもの通り呉服店へと向かい小次郎から今日の仕事クエスを受ける。また町中で済ませられるおつかい系のものだった。

「…じゃ、いつてきます。ああそれと俺、今日の午後は広場じゃなくて上の階層で鍛練したいのですが良いですか？」

こうして徐々に距離を置いて、こつそりここから旅立とう。そう思っていたのだが。「掟があつてな、鍛練の場所はあるの広場のみと決まつてるんだ。そこでやりたく無いなら櫛名田組を抜ける意思表示となるがそれで良いか？」

するとウィンドウがポップアップした。《櫛名田組から脱退します。よろしいですか？ ※脱退すると通常の名前表示になります》は？ええなにそれ：そんなことになつてんの？知らないよそんなの。

「まあ、いいか。」

お世話になつたが、どうせそのうち小次郎に挨拶をして出て行くつもりだったのでそれが少々早まったただけだと思ひ了承ボタンを押す。

「ふう……お世話に……」

「いつかそうなるとは思ったが。……うし、構えろ」

……ん？何だ？構えろ？

「ほら、早く」

そういうと小次郎は壁にかけてあつた薙刀を持ち出し刃先を俺へと向ける。

「え、えつと……？これは……どういう……？」

じりじりと後退りながら小次郎へと訪ねる。

「俺とお前はこれからどちらかが倒れるまで

一騎討ちをせにやあならん」

……は!?何故!?倒れるまでってHPOってことか!?というかまず俺が櫛名田組を手伝うって決めたとき「組員じゃなく見習いならいつ辞めても構わない」って小次郎言わなかつたっけ!?

「何故!?いつ辞めても良いんじゃないやなかつたんです!？」

「ああ、言つたさ。いつ辞めても良いとは言つたが無事で帰すとは言つてねえ」

ええ………アリかよそんなの。先に言つてよお………。心の中で呟く。櫛名田組へ来て何度も思つたことだつたがここまで差し迫つた状態となつたのははじめてだつた。

「ぜああつ!!」

小次郎が薙刀を手にすごい勢いで突進してくる。しかしまだ小次郎の頭上のカーソルは通常のNPCと同じ緑色だった。

「つ…わあああつ!?!」

咄嗟に薙刀を避けようと右へと跳ぶ。薙刀の刃先をギリギリでかわしたがなんとなく速さなのか。…本気だった、今は…。カーソルの色など関係ない、気迫が小次郎が本気で俺を殺そうとしていることを示していた。これは…和解のために話を聞いて貰うにもとにかく先に小次郎を無力化しなければ…。そう思い俺は裏口から広場へ出た。更に屋根に上って裏口の扉を照準に弓を引き絞る。小次郎が出てきた瞬間にまず足を射ろう。動きにくくするためだ。

「…なっ」

驚いて矢を放つタイミングを逃した。戸口から出てきた小次郎は着物の上に剣道の胴のような防具をつけていた。さらに、弓を構えたことがトリガーとなったのか小次郎の頭上にHPバーが追加され、表示されたカーソルは敵対モンスターを表す赤色へと変わっていた。それだけならまだ良かったのだが…

「そんな…」

《K o j i r o u》と記された文字は赤く、少し黒ずんで見えた。Lvやステータスが俺より数段上だということを表している。“小次郎を無力化しなければ”なんて考えは

甘かったということだ。全力で戦っても勝てるかどうか分からない。血の気が引いてゆく。指先に力が入らない。

「……………ふっ!!」

小次郎が薙刀を左脇に構え一気に振り抜く。なんだ…? いくら薙刀とはいえ屋根の上の俺には届か……………っ!?

「……………くおっ!?!」

薙刀の刃が通った軌道が青白い光の帯となってこちらへ飛んできた。ギリギリのところで回避するが、体勢を崩して屋根から転げ落ちる。

「……………うぐっ!!」

落ちた勢いでゴロゴロと数メートル転がったが何とか立ち上がると、鳩尾みぞおちに薙刀の柄がクリーンヒットする。一瞬息が止まった。そのまま後ろの壁へと叩きつけられる。今の一撃だけでも1/4程HPを削られた。

「次は柄でなく刃だ。」

小次郎が冷静に言い放った。

「くっ…」

速い。そして一撃が重い。おまけに遠距離攻撃も出来るとは…弓で戦うのは厳しいか…?」

「お前は何処へ行きたい？何故ここを去る？」

俺は……

「…仲間の元へ」

「フン」

すると小次郎は薙刀を後ろに構える。今度は何が来る…？とりあえず俺も弓を構える。遠距離技か、突進か…

「…っ!!」

しまった。極度の緊張と焦りから引き絞ろうとしていた矢を中途半端なところで離してしまった。

「らあああ!!」

小次郎が突進しながら後ろに構えていた薙刀を投げた。突進と遠距離を合わせてきた!? 薙刀は難なく風圧で矢を吹き飛ばしあつという間に俺の目の前まで迫っていた。

「いっ、っ…!!」

完全に避け遅れた。柄で殴られただけであの威力だったのに刃をまともに受けたらどれだけHPを持つて行かれることか。何としても直撃だけは避けなければならない。

「ぬあああ!!」

咄嗟に弓で薙刀をいなそうと試みる。少々軌道をズラせたようだが、右肩に薙刀が深

く突き刺さった。それと同時に弓が真ん中から二つに折れた。

「くそっ……!!」

折れた弓を握りしめながらHPバーを見る。残り半分のところまで減っていた。こんなの……無理ゲーだ。勝てっこ無い……ここで死ぬのか……?こんなところで……色々なものから逃げてきた罰なのだろうか。肩に刺さった薙刀を左手で引き抜き壁際に捨てる。

「……………剣をとれ」

どこからか日本刀を持ち出してきた、小次郎が言った。

「……………」

「お前は何処へ行きたい?何故ここを去る?」 仲間の元へ」と答えたのは嘘ではない。今も各々の身の丈にあつた場所で戦っている仲間たちのことだ。しかし心のどこかで迷いがある。俺は彼らから逃げたのに今さらどんな顔をして戻れば良い……?沈黙を破り、小次郎が口を開いた。

「一騎討ちは一人で戦うもんじゃねえ」

……………?は?何を言い出すんだいきなり。一対一で戦うから一騎討ちというんじゃないのか。

「俺は櫛名田組の立場と、仲間と、仲間と高めあつてきた鍛練の成果を掛ける。その為にお前に勝つ。お前を殺す。」



…そうか。小次郎は、今の自分があるのはバックボーンで色々な人との関わり、経験を積んできたからだ。と言いたいのか。

「俺は…」

いい加減、素直になろう。枷を、蓋を、全部壊そう。実力が上の相手に出し惜しみをしても損しかしない。…………俺はこれをどこで学んだ…？

「たぶん…」

現実世界だ。全力でぶつからないと叶うものも叶わなくなってしまう。しかし、気持ちだけでもダメだ。経験や練習があつてはじめて自分の力となるはずだ。

「全てだ」

「…あ？」

「上手く言葉にできない。でも、形なりふり振り構わず全力でお前を越えて行かなければならぬんだ!!」

自分で自分が何を言っているのかわからなくなってくる。しかし心からの叫びなのは間違いない。弓を捨て、ウィンドウを操作し直剣を装備する。

「良い返事だ」

…小次郎がいつものニイとした笑みを浮かべる。

「うおおお!!」

そこからはよく覚えていない。各々の刀身を染める色とりどりのライトエフェクト、轟音、閃光。小次郎のHPも俺のHPもジワジワ減ってゆく。

「もう、見切った」

突然、小次郎がスキルを出すのを止めて静かに刀を中断へ構える。どこも力んでいない自然な姿勢と、そこだけ時間が止まっているかのような妙な緊張感に包まれている。それに一抹の不安を覚えたが俺は間髪入れずに次のソードスキルを発動させる。

「……………!?!」

俺の剣と小次郎の刀が触れた瞬間、剣が軽く跳ね返された。切り返して次のスキルを放つがまた跳ね返される。

「悪いな。俺は櫛名田組全員と手合わせをした。直剣使いの技は全部対処方を知っている。あとはお前が使える技を把握出来れば事足りるんだ」

そんな……………もうチートじゃないか……………これ負けイベ?この期に及んでこんな事を思うのは少々緊張感が足りないだろうか。いや、例え負けイベでも…

「…それでも、俺はお前に勝ちたい」

紛れもなく本心だ。

「俺もだ。お前に勝ちたい。お前が対人の熟練者<sup>スペシャル</sup>だったなら、俺に勝てたかもな」

「勝ちたい」 HP0が死を意味するこの世界の戦闘でこんな思いをするとは思わ

なかった。遊びではなくなってしまったとはいえ、これはゲームだ。ゲームの対人戦は、数値の兼ね合いによって変動するとはいえ基本は、いかに相手の攻撃を避け、相手より多く自分の攻撃を当てるか”が勝敗を決める。例え自分の一撃が相手のHPを数ミリしか削らなかつたとしても、この数ミ리를、わずかと見るか、着実とみるか。そういうことだ。

「…そうだな」

気持ちは整った。何度も練習したソードスキルは防がれる。なら俺は、小次郎が言う通り経験から小次郎を上回るしかもう道はない。

スベシヤリスト  
「熟練者ね…」

もちろんそう呼ばれる程の腕は無いし、剣で人を斬る経験は初めてだ。しかしそれは  
アインクラッド  
この世界でのことだ。

「ふう……………つ!!」

俺は静かに剣を逆手に持ち、腰を落とす。ソードスキルは発動しない。そのまま小次郎へと突進する。イメージしろ、思い出せ…………!!もつと速く…遠く!!もつと奥へ…………  
駆け抜けるっ!!

「はあっ!!」

追い抜き際に小次郎へと斬りつける。その瞬間、微かに白い閃光が一本走り小次郎の

HPバーが僅かに減った。

「かあったい……あの胴の防具のせいかな……？」

思ったより小次郎のHPが減らなかつたため思わず口走ってしまふ。小次郎がやや驚きながら体を反転させる。

「……もう遅いつ!!」

俺は即座に剣を順手に持ちかえ、水平に剣を構え前傾姿勢をとる。一瞬刀身に紫色の雷が走った気がした。そのまま小次郎の右脇腹を狙って一気に剣を前に出しながら前へ思いきり跳ぶ。

「うおっ!」

小次郎が驚きの声を上げる。俺はそのまま再度踏ん張り斬り上げるように跳び上がったから着地する。上から見るとV字になるように駆け抜けたためこちらからは小次郎の背中が丸見えだ。しかしここで調子に乗って再度斬り込むと……大方、斬られる。

「……つらあ!!」

小次郎がソードスキルのシステムアシストに従って360。ぐるっと水平に刀を振った。

「……やっぱりね」

万が一その場での範囲技ではなく移動する技が使われたときのため、後ろへ跳び退き

ながら投擲スキルでピックを前方にバラ撒く。……良い位置だ。再度俺は剣を逆手に持ち腰を落とす。スキル後の硬直から解放された小次郎が俺の突進に備えて刀を体の前へ出しガードの姿勢をとる。

「ふっ…!!」

俺は小さな気合いと共に動き出した。さつきよりは遅いが陸上の幅跳びの踏み切りのような変則的なステップで相手との呼吸をズラす。三歩目、幅跳びなら最後に踏み切る足が地を蹴った瞬間、上半身を左に引きながら剣を逆手に持った右手を左肩につけ、剣先を小次郎の肩口へ照準する。

「…っ!!」

目を見開き少々うろたえている小次郎と視線がぶつかる。…そうだ、存分に焦れ。いつものお返しだと言わんばかりに小次郎へ微笑を返す。捻った上半身を元に戻す勢いととともに、手首にスナップをきかせながら腕を伸ばす。

「くっ…!!」

小次郎が唸る。斬撃を防ごうとしている姿勢は突き技に弱い。そして全身を使った突き技は腕が伸びきる寸前の一瞬だけ凄まじい貫通力を持つ。その一瞬、青い閃光が俺の刀身から吹き出した。

ズガン!!

俺の剣が小次郎の防具の金具を貫いた。金具が弾け跳び防具は破損、小次郎が驚いた顔をしている。これで少しはこちらの攻撃も通りやすくなっただろう。——対人戦での戦闘スタイルは星の数だけあるのだろうが、俺の場合は嫌がらせをして、嫌がらせをかけて、畳み掛けるっ!!

「やっぱ対人戦はこうでなくちゃ」

小さく呟く、気分がノツてきた。互いのHPは共に残り1/6程となつている。最初は余裕綽々だった小次郎も今は動揺が隠せなくなつていているようだった。この世界の戦い方しか知らない小次郎にとって、それを一切使わない未知の戦い方は恐怖でしかないだろう。反対に俺は今までに無く穏やかな気分で戦っていた。何故なら、忘れかけていたことを思い出せたからだ。俺がここまで小次郎を追い詰められているのは別のゲームで一对一の対人戦を散々やったからだ。その中で戦い方を考え、覚え、お互いに高めあつていく、それこそ仲間といえる存在と共に。居合いや斬撃の避け方は戦士たちが。上手い嫌がらせのやり方を成らざる者たちが。間合いの詰め方や追い込まれそうなどきの掻い潜り方は猟兵たちが。拳の避け方は修道士たちが。支援の重さを聖職者たちが。長物の避け方は放浪者たちが。遠距離広範囲攻撃の厄介さを魔法使いたちが。動きを封じられることの怖さを作家たちが。勝利することへの諦めの悪さを復讐者たちが。彼らがくれた圧倒的な「戦闘経験」が小次郎を上回つた。

彼らだけではない。アインクラッドで出会い、快く俺を仲間に迎え入れてくれた人たちも、上を目指しながら前向きに頑張っているユウキたちや中層プレイヤーたちも、たとえ今側にいなくても俺と肩を並べて戦った人たちも。いつの間にか視野が狭くなつて忘れかけてしまつていただけで、多くの仲間たちがくれた「経験」や「気持ち」が今の俺を形作っている。

「ぜえああっ!!」

壊れた胴を気にしながらも小次郎が刀を上段に振りかぶる。

「はあっっ!!」

俺はその刀を追いかけるように上半身と剣を左に引き剣を振りかぶりながら小次郎に跳びかかる。それを見た小次郎はギョツとしながらもすぐに真面目な顔に戻り刀を振り下ろそうとする。

「風よ……吹き荒れろ!!」

思わずそう叫んでしまった。イメージとしては、空中で水平に回転しながら多段の斬撃を繰り出す……進○の巨人の回転斬りのような感じ……だったのだが、システムアシストの無い状態でそんな離れ業は繰り出せなかった。叫んでしまった手前少々恥ずかしくなるが今はそれどころではない。一気に剣を左から右に一閃する。剣の軌跡が水色の風を纏っている。

「く……………うっ……………!!」

小次郎の上段斬りと俺の横風がぶつかりそのまま鏢迫り合いになった。俺の横風にシステムアシストははたらかないはずなのだが、不思議と体は宙に浮いたままになっている。

「つうおとおお!!」

小次郎が吠えた。押し込まれそうになる。

「つ……………!!吹き……………飛ばせえええ!!」

次の瞬間、俺は剣を振りきった。小次郎の手から刀が抜け遙か後方へとんでゆく。イケるっ!!宙に浮いたまま俺は上段へ剣を構える。すると刀身の回りに今度は緑色の風が集まりはじめる。ガラ空きとなった小次郎の顔を目掛けて剣を振り降ろそうとした。その瞬間、右から小次郎の耳を目掛けて飛んでくる短剣が目に入った。

「っ!」

思わず振り降ろす剣の軌道を外へ開き、小次郎ではなく短剣を撃ち落とす。すると左から赤い、血の色にも似たポリゴン片がとんでくる。驚いて視線をうつすと、小次郎が俺の頬の横で手を開いていた。その手の平には大きな矢が刺さっている。咄嗟にその矢を小次郎にの手から引き抜く。矢のダメージのせいで小次郎のHPはもう数ドットしか残っていない。さらに麻痺毒のアイコンが点滅している。



「…っ！どうして!!」

「へっ…お前…こそ…それより、あつちだ」

屋根の上に人影が見える。それを視認した瞬間

「っ!?!あつ!?!」

屋根の上の人物が放った矢に、持っていた剣を跳ね飛ばされてしまった。それだけでなく、他の櫛名田組の連中はみな麻痺をかけられ動けなくなっているか、屋根の上の人と同じような黒装束の人物と交戦中だった。すると屋根の上の人物が静かに、通る声で言った。

「阿漕あこぎな商売をしていると報告があつたため来てみれば、街中で武器を扱うのは午後からという掟を破り、見慣れぬ輩に追い込まれる頭目とは…呆れたものだ」

「なんつだと…!?!」

何なんだあいつは。俺の着物の裾を小次郎が引つ張る。

「ありやあ…見廻り組の暗部だ…もう良い、お前は…逃げる…」

何を言い出すんだ。

「前にも…お前と同じように突然この町へ現れ…櫛名田組の仲間になつた奴がいたんだ…せいともある時…自分には…行かなくてはいけない場所が…あると言つて…ここを去つた…だが…もうせいとは…いない……………」

そういう設定なのか、俺のようにクエストを遂行させたプレイヤーがいたのか定かではない。

「状況証拠……だけだが、そいつは……その暗部に殺された……捕まって、俺たちの情報を……揺すられたんだろう、敵対する……組織を、潰すために……」

詳しい事情はよくわからないが、事実でなくそういう設定なのであつてほしいと思う。

「俺は……守れなかつたんだ……中途半端に面倒をみて……自分の道を……見つけた仲間を……無用ながららみに、巻き込んで……だから、お前がここを去る……ときは、どれ程の腕に……なつたかをたし……かめようと……」

「気を悪くしないでほしいんだけど、小次郎。そいつが……本当は元々見廻り組のスパイだつたつてことはないの？」

小次郎はふつと目を伏せる。

「時雨!!」

広場の端、弓の練習場の方から一人、俺を呼び弓を投げて来る組員がいた。即座に屋根の上の一人がその組員を矢で麻痺にかける。

「……分からねえ。でも……お前は違うだろ。だからもう……良いんだ、逃げる！」

投げられた弓を俺が受け取ると同時に小次郎が叫んだ。……あのとき、小次郎ではなく

短剣を弾いたのはなぜだろう。咄嗟のことで自分でも理解出来ていなかったが、そうか。

「…あぶねえと思つたら、咄嗟に体が動く…それが仲間つてもんだろ!!」

ハツとした。ああ…そうだよな、小次郎。

「…笑止、終わりだ櫛田小次郎!」

屋根の上の黒装束が叫ぶ。すると周りで戦っていた黒装束の男たちが全方位から俺たちに集まってくる。どうする。どうしたら良い。弓はある。あとは小次郎の手に刺さっていた矢が一本。屋根の上のアイツを狙っても、周りの黒装束たちに小次郎と俺は殺される。どのみち周りを制圧しようにも一本の矢ではどうすることもできない。

「逃げろと、言つてんだろ…時雨え!!」

うるさいぞ。また俺に、仲間を見殺しにして自分だけ助かれと言うのか、そんなの認めんだ。考えろ、時雨として…何が出来る?

「つーそうか、上か!!」

俺は空へと矢をつがえ、引き絞る。名前シゲレらしく、雨のように矢を降らせるんだ!!

「いっつけえ!!!」

矢を離れた瞬間、小さく効果音がした。構わず俺は小次郎に覆い被さる。小次郎のHPが尽きないことを願いながら。周囲でいくつもの悲鳴と爆散音が聞こえる。集まっ

てきていた黒装束たちのものだろう。背中にいくつもの衝撃を感じる。そういえば：自分のソードスキルを自分で食らうと、ダメーヅって入るのかな：？もし入るのだとしたら、小次郎との戦闘で心許なくなっていた俺のHPも危うい。

「どけ、ハース」

いつの間にか麻痺から復活していた小次郎が俺を軽く殴る。顔を上げると黒装束たちは跡形もなく消え去っていて、麻痺から回復した組員たちがちらほら起き上がりはじめた。小次郎のHPは残っている。ハッとして自分のHPバーを確認する。

「え…なんで…?」

丸々一本、1ミリもかけることなく俺のHPバーはそこにあつた。

「お前が矢を放つたあと、俺はお前を組員から除名したんだ。元々お前は街中じゃ何があつても死なない人種だろう?」

小次郎からクエスト報酬を受けとる。特に何の効果がついている訳でもないあの町人の着物と同じものだったが、以前貰ったものは戦闘でボロボロになってしまっていたため俺にとつてはこの上なく嬉しいものだった。もう小次郎が俺を時雨と呼ぶことは二度となかったし、俺の矢を逃れた黒装束の行方もわからない。しかし、もうただの「プレイヤー」と「NPC」となった俺たちにはどうすることも出来なかった。

「行ってこい。世話になったな」

小次郎がいつものニイとした笑顔を向ける。

「世話になったのはこっちだよ。本当にありがとう、またね」

ゆっくりと小次郎に背を向ける。攻略組はそろそろ第十二層のフロアボスに挑む頃だろうか。今から俺なんかひよっこり行ってもボス討伐のレイドに入れて貰えるかわからないが、コハルの顔でも見に最前線へと向かおうと思う。他にも、また話したい人たちがたくさんいる。

「あ、待て」

小次郎に呼び止められる。

「お前の剣技、名前はあるのか？」

「…そんな大層なもんは無いや、ただ…強いて言うなら…成らず者の放蕩者は、いつでもどこでも放蕩者らしく戦う、それだけだよ」

気恥ずかしくて、振り返らずに背中を向けたまま答える。転移門を目指して一歩踏み出す。さあ、帰ろう。居るべき場所に帰るために。